

犬たちとの暮らし

多頭飼いの記録



mydogrun

はじめに



左から

Gシェパード♀「優（ユウ）」9才、ミックスメ♀「ジェリー」12才、ミックス♂「ロク」15才、
、
ラブラドル♂「界（カイ）」4才、ラブラドル♀「楽（ラク）」7才、Gシェパード♂「駿（シュン）」8才

2006年撮影

私は朝起きるとまず、犬たちが眠っているクレートの扉を、一頭ずつの名前を呼びながら開けていきます。

待ってましたとばかり元気よく寝床からとび出してくるラブラドルの親子、「ラク」と「カイ」、そしてシェパード犬の「ユウ」とミックス犬の「ジェリー」、私の部屋を占領して寝ていたシェパード犬の「シュン」とミックス犬の「ロク」も二階から降りてきて六頭の日が始まります。

犬たちは、クレートを並べてあるサンルームからレンガを敷き詰めてある庭に走り出て排尿そして排便。

「ラク」は目立たぬ隅のほうで前足をかきながら、「ユウ」は歩きながら、せっかちな性格なのでしょう。「カイ」はクルクル回りながらあいた場所でお構いなく、といった具合に。

私は前日に食べさせたものや餌の量を思い出しながら一頭一頭の便をみて健康チェックをします。みながいつもどおり快便だとホッとします。またそれぞれの仕草も十犬(人)十色と感じさせられ苦笑してしまうのです。

こんな忙しい朝のひとコマを友人に話すと「わーっ、大変でしょう」「餌代が・・・」とか「雨の

日の散歩は・・・」などと、必ずきかれます。確かに六頭という大所帯なので、犬たちの世話は時間、労力そして経費もかかりますが、大変というより私にとっては犬との楽しい一日の始まりなのです。

犬は古い遺跡調査によって、数万年前より人に飼われていたと云われていますが、牧羊犬や狩猟犬として、あるいは警察犬、盲導犬、セラピー犬など、多種多様な分野で人のために働き、そして人に飼われて種を継いできました。

わが家で犬を飼い始めたのは、いまは家庭を持つ息子たちが小学校に通っていたころですから、かれこれ三十年も前のことになります。それ以来、どの犬も家族の一員として迎えてきました。犬の世話は一日も欠かすことができません。当然長期で家を空けることなど無理なので、それならば犬との生活にどっぷり浸りきろうと考えたのです。

その思いは、その後わが家の生活を想像以上に変えていくことになったのです。

多くの犬仲間と知り合うことができ交流が深まったし、ワンボックス車に犬たちを乗せて海水浴や山登り、旅行など様々な体験をさせてもらいました。犬たちを広い草原で自由に走らせるドッグランもつくりましたし、長い間、プロの訓練士について犬の訓練を学んだ時期もありました。

犬の寿命は短く、人なら小学生か中学生ほどの年齢で一生を終えてしまいます。私はこの三十年の間に五頭の犬を見送りました。どの犬も私の腕に抱かれて安らかに息を引きとっていきました。

動物は死ぬと可哀想だからもう飼いたくないという方がいらっしゃる。しかし命あるものは死を避けて通ることはできません。私は動物の命も人と同じように尊ぶべきだと信じています。

わが家の飼い犬たちが亡くなったとき、私は別れを悲しむより、飼主を最後まで慕って生涯を閉じていった彼らの命の美しさに感動させられました。

元気なときは精一杯無邪気に生きぬき、そして自然の定めに対して決して逆らわず、静かに死を受け入れてゆく姿に、生き方と死に方を教えられたように感じました。

いま犬を飼う人が増えていますが、犬は飼い方次第で素晴らしい友となり、伴侶ともなる動物だということを、私のライフワークの記録を綴ってここにお伝えしたいと思います。



私の育った環境にはいつも周囲に動物がいました。祖父は朝早くハコベをとりにいき、それを細かく刻んで米ぬかとまぜ、またしじみ貝をつぶして鶏に餌としてあたえていました。また春になるとヨチヨチ歩きのひよこを鶏小屋から出してあそばせていました。幼かった私は、千鳥足で歩いているひよこを抱きかかえ、その時の壊れそうで柔らかな小さな生き物になんともいえない温かみを感じたものでした。豚

も綿羊もそして必ず猫と犬もいました。日常、動物とごくあたりまえに触れ合っていたので、ことばを持たない動物と人間との絆をテーマにした物語がすきでした。

息子たちが小学生になったころ初めてオスのビーグル犬を我が家に迎えることにしたのです。家族を含め五番目の男の子ということで、名前は「五郎 ゴロー」となづけました。

ペットショップから購入してきた一日目の夜、一晩中パイパイ泣かれて寝不足の一日になってしまったことがありました。思い返せば当然のことなのです。まったく犬の気持を理解しようともせず、動物のいる生活はいいものだと、都合のいい時だけ相手をし寝るときは、「あなたの寝床はここですよ」と誰もいない部屋で休ませていました。そしてなければとんでいき世話をやく、最初から悪い癖をつけてしまったのです。こんなに手のかかるものかしら、こんなはずではなかったと、その存在を重荷に感じるようになってきたのです。しかし子犬の成長は早く、日ごとに愛着がわき可愛く感じていくので、朝夕の散歩だけは怠りなくやっていました。

なきつづける根気強さにまけて室内に入れた夕食時のことでした。

当時小学二年生だった息子がちょっとよそ見をしたその隙を狙って、1歳にも満たない「ゴロー」がすごい勢いでカレーライスを横取りして食べ始めたのです。とられた本人は泣きそうになる、兄たちは笑い転げる、叱るタイミングを逸してしまった私はただ「アレアレ〜」と見ているだけでした。

タイミングをはずした叱りは犬を迷わせるだけだといまでは理解していますが、いつも私の叱りは犬を迷わせていたのです。一方、散歩に連れだしリードをはずして少し離れたところから

「ゴロー、来い」と呼ぶと私の顔を振りかえりながら逆の方向へ走っていく。庭に繋がれているので、リードを少しの時間放してやると、思いがけないところから脱走していなくなっている。

「しまった！」と思い、近所を捜すことは度々で、とうとう行方不明になって警察やシェルター（保護施設）のお世話になったこともありました。

警察署に犬の特徴を連絡すると「ああ、その犬なら保護施設に預かってもらっています。そちらへ案内しますからすぐ来てください」といわれ、パトカーに先導され、ずいぶん人里はなれたと

ころに行ったこともありました。

激しい犬の鳴き声が聞こえてくる方に歩を進めると、そこには五十頭ばかりの犬たちが数匹ずつ仕切られた犬舎のなかで飼育されていたのでした。1990年（H2年）ころのことです。飼い主から見放された犬たちを保護し世話をされている外国人の方がいらっしゃる。当時の私には到底考えられないことで驚くばかりでした。

ちょっと間違えば私だって「ゴロー」をシェルター送りにしていたかもしれない無責任な飼い主だったからです。

施設のオーナーは私に「よほど、家に帰りたかったのか、ずっとなき続けていましたよ。こんな犬は珍しい」と言われたのです。かすれた声になっていた「ゴロー」を恥ずかしい思いで連れ帰ったのでした。



10歳になったころに、家の近くで保護したビーグルのミックス犬「ロク」が加わってから、無駄鳴きや脱走癖も少なくなっていました。

きっと、外で一人ぼっちで繋がれていることにはたえられなかったのでしょう。犬は群れで生きる動物ですから、何よりも飼い主のそばがいいにきまっています。

犬の10歳といえば老犬の仲間入りをする年齢ですが、初めて新しい仲間を迎えた「ゴロー」は若返って元気になっていきました。

「いったいお前は誰だ！いつの間に俺の寝床に入ってきたんだ！」とはじめのうちは牽制していましたが、もともと闘争心や攻撃的な性格ではなかったので、すぐ「ロク」を受け入れ、弟分として6年間よい関係で暮らしていました。

「ゴロー」はほとんど病気らしい病気はせず、犬にとって長寿といわれる17年目の冬を越した四月のある晩、安らかな死を迎えたのでした。一日のほとんどを寝て過ごし、亡くなる一週間くらい前から排泄は寝たままの状態になっていました。

私は朝起きると一番にお漏らしをしている「ゴロー」の体をお風呂の残り湯を使ってきれいに洗ってやりました。居心地よさそうに寝そべる姿が幸せそうでした。「おもうぞんぶんすきなところをたびしてきたよ～」そんな夢を見ているようでした。また時には寝息をたてて眠っていました。ただ、もし私が外出している間に息を引きとっていたら、きっと後悔の念にかられるだろうという思いをたえずもっていたのです。ところが長い間犬を飼っていた知人から「犬は飼主が帰るのを待っているものよ」と聞かされ、彼女の言葉を信じつつもはたして「ゴロー」はどうか半信半疑でした。外出から帰ってきて寝息をたてている姿を見るといつも胸をなでおろしていました。

そして1997年（H9年）四月十一日の夜十時ころ、突然私たちを呼ぶように大きく「ワン」とひと鳴きしたのです。急いでかけ寄って濡れた寝床を取り換え静かに体をさすってやると、うれしそうに尻尾を振り穏やかな呼吸を四、五回くりかえして最後に大きく息を吐き切ったとおもうと宿便をだし再び動くことはありませんでした。

あまりにも自然で見事な逝き方に感動し思わず手を合わせていました。

犬は長生きできたとしても十数年くらいです。息子たちにとって、自分を追い越して老犬になり、逝ってしまった姿はまさに「命の縮図」を身をもって教えてくれたように感じたのです。

犬を飼う楽しみを教えてくれた「ロク」



1991年（平成3年）の初夏、いつものように「ゴロー」をつれて散歩にでかけると、道路わきで近所の人たちが、保護した四ヶ月くらいの子犬を囲んで「どうしよう。。。」と思案しているところでした。私は「もう一頭いてもいいかな」と思っていたこともあり、みなさんと相談して四頭の中の一頭をつれて帰ることにしたのでした。

ビーグル犬の混じったミックス犬で、「ゴロー」の次に来たので「ロク」と名づけました。

それまでどのような暮らしぶりだったか定かではありませんが、背広を着た人の姿を見ると尻尾をさげて逃げだしたり、見知らぬ人がおやつを差し出すと後ずさりをして決して食べようとはしませんでした。

人に捨てられ、一昼夜野宿させられた苦い体験は、時には上目づかいをしたり、相手を観察しながらより警戒心を強くしていったのかもしれない。しかし、この臆病で慎重な性格も私を信頼できる飼主だと認めるようになると、一気に服従心や忠実さを現わして私に身体を擦り寄せお腹まで見せるようになり、何とも愛すべき飼犬となっていったのでした。

こうして我が家の犬は二頭に増えたのですが、世話は負担になるどころか返って張り合いや楽しみが二倍、三倍と膨らんでいったのです。それは私が散歩の用意をして外に出るまで、吠えもせず勝手口に控えて家の中を覗きこんでひたすらジッと待っている。外へ出て「さあ行くよ」と声をかけると嬉しそうに尻尾を振って私のまわりを駆け廻る。その健気なしぐさが微笑ましく「ロク」に向かって話しかけると、私の言葉を理解しようとするように首を傾げて口元をジッと見つめる。気持ちが通じていくようで楽しそうにする姿を見ると自然と散歩する時間を長くしてしまう。そしてさらにいろんなところへ連れて行ってやりたいと考えるようになっていったのでした。

逃走癖のある「ゴロー」と違って「ロク」は放しても私の前や後ろへ行ったり来たりして、少し離れた所から呼んでもすぐ戻ってきたのでした。先住犬との比較は「ゴロー」にとって迷惑なことだったでしょう。本来はもっと利口な犬だったはずですが、犬が好きというだけで、トレーニングをする気持ちもなく未熟な飼い主の元で飼育されてきたので本来の忠実さも裏目に出ってしまったのです。

「ロク」が来てから、夫は二頭いっしょに入れる犬舎（間口120センチ、高さ90センチ、奥行60センチ）を作ってくれました。夜になるとこの大きな犬舎に入ってお互い体をくっつけあって寝ていました。何もかも不安が先行していた「ロク」は、体を寄せても怒りはしない優しい「ゴロー」に群れで生られる安心と喜びをもらったのです。

親しい友達と行く山歩きもいいけれど、犬といっしょに山を歩くのも楽しいだろう。自然の風景をご馳走にお弁当を持って人気のないところへ行き思いきり走らせてやりたい。犬は飼主といることが何よりうれしいのに「ゴロー」にはそんな気持ちを与えてやることができないまま逝かせてしまった。残念な思いはあるけれどこれからは犬と過ごす時間をもっと楽しんでいきたい。

「ロク」は私に犬を飼う楽しみをおしえてくれたのでした。

犬は人間以上に生きる知恵を持つ



ある日の午後、犬たちを車に乗せて近くの山へ遊びに行きました。彼らは待ちかねたように山の中へとびこんでいきました。しばらくして「ロク」だけが戻ってこない。何度も「ロクー」と大声で叫んでみるけれど、よほど遠くまで行ってしまったのか、一時間ほど待ってみたけれど戻ってきません。その日は暑かったので、戻ってきたときのためにバケ

ツに飲み水をいれ、臭いのついたタオルも一緒に掛け、最初に放した場所に置いていったん自宅へ帰ったのです。そして大急ぎで警察や保健所、動物愛護センターに連絡をいれたあと、夫の職場にも電話をしてから再び犬を放した場所へ足を運びさがしたのです。早く帰宅した夫もいっしょにさがしてくれたのですが、どうしても見つかりませんでした。

ようやく人を信頼できるようになり、気の合う仲間とも過ごせるようになった、あのけなげな顔がわすれられない。私は夜暗くなってから夫ともう一度最初に離した場所へ行ってみることにしたのです。「どうか見つかりますように！」と祈る気持ちで、真っ暗な山沿いの道をノロノロ走って行くと、前方を睨んでハンドルを握っていた夫が突然「ロクだ！」と叫んだのです。車のライトに照らされた白い光の中に、バケツを置いたあたりをウロウロしている「ロク」の姿を発見したのです。「あーよかった！よかった！」私は夢中でとび降りて「ロク」をつかまえ急いで車に乗せたのです。どれほど心細い思いをしたことであろうかと、しかしその思いとは裏腹に「迎えに来てくれたんだね」と無頓着な素振りでまったく動揺している様子ではなかったのです。後で専門家に聴くと「嗅ぎなれたタオルを置いていたのが効を奏したのです。必ずお母さんはこの場所に迎えに来てくれると信じていたのでしょう」といわれたのです。

海へ連れて行ったときなど、夫が「ロク」を深いところまで抱いてつれていきそこで放してやると、岸に向かって必死な形相で泳ぐ姿はこっけいでした。その後新しい犬が次つぎに増えて群れで飼うことになったのですが、群で生きる姿から犬は人間以上に生きる知恵を持っていることを教えられたのです。



「ロク」が10歳になったとき、一度の威嚇で決着がつきボスの座をシェパード犬「シュン」に譲りました。その後何の未練も残さず、飼主だけを頼りにして、老犬の貫禄と威厳を保って群れ社会を生きていました。晩年になってから、後に詳しく述べるドッグランへつれて行きましたが、仲間から外れて草の上で静かに寝そべっているだけでした。「ロク」は2006年（H18年）に県の獣医師会より長寿犬として表彰

され、そして翌年、16歳で長寿を全うしたのです。

15歳を過ぎた頃より、急に気力がうせ排便にとっても時間がかかるようになってきました。人でいえば80歳をとっくに過ぎている年齢です。這いずるように寝床から出て自力で排泄をしていましたが、ついに立ち上がれなくなり寝たきりになってからは、オシッコを漏らしてお尻がぬれると「取替えてくれー」とおかまいなく大きな声で私を呼ぶのでした。犬が人のなかでしか生きられないことを証すように、最後まで精いっぱい飼主を頼って生きていました。

2007年（平成19年四月二十四日）夕方買い物から帰ってから、「ロク」の目やにを拭きとって水を飲ませてやると、おいしそうに「ゴクン」と音を立てて飲みました。よほど喉が渴いていたのでしょう。もう少し飲ませてみると急に口から水がこぼれ出て、私の腕の中で力なく倒れこんできたのです。「ロク！ロク！」私は「ロク」の体をゆすりましたがもう何の反応もありません。今のいままで「ロク」は私が帰るのを待っていてくれたのです。もう呼んでもただ亡骸だけと感じたとき、悲しい気持ちがどっと湧き出し「ロク」にすがって泣いたのです。死と直面したその瞬間、言葉にできない悲しさと寂しさが湧き出てきたのでした。しかし私を待って静かに安らかに逝った「ロク」の姿にいいしれぬ感動と生のはかなさを感じさせられたのでした。うす紫色の小さな花「しば桜」は、意地を張らず強くて「ロク」のようで、私は埋葬したお墓の盛土の上に思い出として植えたのです。



「ゴロー」と「ロク」がいい関係で暮らし始めて四年の月日がたっていました。そして次（三頭目）にやってきたのが「ジェリー」だったのです。

当時私は家から車で十五分くらいの距離にある乗馬クラブに通っていました。あるときクラブの仲間から北海道へ外乗の旅にいと誘われたのです。そしてファームで管理されている種牡馬たちの様子も身近に見せていただく予定で出発したのです。

競走馬の知識はまったくなかった私でしたが、引き締まった艶やかな馬体を目前にしたとき、大切に管理されている品の良さと血統を重んじる世界なのだと感じたのです。結果を出したノーザンテースト、サンデーサイレンス、メジロマックイーン、タマモクロス、トウカイテイオーなどなど・・・芸術の世界のオーラを放っていました。私は夢中でシャッターを押し続けたのです。

また知人がお世話になっている牧場で子馬を厩舎に入れる仕事を手伝わせてもらったことがありました。

私が厩舎に入れた子馬が後のシンザン記念GⅢ優勝馬のダンツシリウス号で、父親はタマモクロスであることを後で知らされました。馬の顔を見分けることは難しいのですが名前だけはしっかり覚えています。

童謡に「お馬の親子は仲良しこよし・・・」という歌詞があります。子馬を先に引いて厩舎に入れると、お母さん馬はわき目もふらず後を追って急いで厩舎に入ってきます。距離を置きながらいつも子供を注意深く見守っているのです。馬の親子の沢渡り（蹄を強くするために浅瀬を渡らせる）も感動的な風景でした。



さて、知人が懇意にしていた牧場には五十頭ばかりの犬たちが気の合う仲間と群れをつくって放し飼いにされていました。ダルメシアンをお母さんにもつ仔犬六頭が厩舎近くの藁を積み上げ

たところに座ってジーっと私たち珍客を観察している様子が目にとまったのです。その中の黒毛一色の一頭をみて「この子を頂いて帰ろうかしら」と申しでると、牧場主の奥さんはすぐ了承してくださり、その仔犬に「あなたは幸せね」と声をかけていました。

これが「ジェリー」（メス）との出会いとなったのです。

「ジェリー」という名前は外乗したときに知人が乗った馬の名前なのです。道産子とサラブレッドのミックス馬でお尻や背の幅が広く安定感のあるりっぱな馬でした。前の馬が走ればはしり、止まればとまる。まだ駆け足を体験していない彼女でしたが、落ちないようにしっかり手綱を握ってさえいれば馬まかせの騎乗でも安心して駆け足ができたのでした。あれから15年経った今でも「ジェリー」と呼ぶたびに、外乗して楽しかった日々へタイムスリップしてしまうのです。

帰るその日、航空便に「ジェリー」を乗せていくには間に合わない時間になっていました。幸運にもその日、調教師の方がおられて「馬運車で馬を運びますから一緒に連れて行ってあげますよ」と言って下さったのです。そして半月ほど経った六月末に「ジェリー」の着く日時を牧場主の方から電話をいただいたのでした。



兄弟や仲間と別れて馬と一緒にどんな旅をしてきたのだろうか。

調教師の方にお礼を言い「ジェリー」を受け取って車の助手席に乗せようとする、こわごわと足元のマットに身を丸めてちいさくなっていました。今度はどこへつれて行かれるか不安だったに違いありません。

家に着くと「ゴロー」は、身元を確かめるように身体中の臭いをしつこく嗅ぎまわっていました。一方「ロク」は、親愛の情で迎えるタイプでなく、初対面のジェリーを敬遠する態度で寄せ付けようとはしませんでした。しかし自分と同類がいたことで「ジェリー」は少なからず安心したようでした。

「ジェリー」は仔犬がよく見せる無邪気な人懐っこさより、人の手がかけられていない野性の強い印象でした。用心深くまわりを観察し、新たな飼い主である私に対しても最初は警戒して距離をおいていました。自分の名前が「ジェリー」でこの家の一員だと認識し始めてから、仲間と馴染むようになっていきました。

ある朝、息子を駅まで送るため車で出かけたあと、私について出ようとして90センチの高さに囲った柵をとび越えて失敗してしまいました。「キーン」とすごい悲鳴が聞こえたので夫が急いで外へ飛び出して見ると、柵に後ろ足を引っ掛け宙吊りになって失禁していたそうです。その後高いフェンスに取替えたのですが、今度は外出先から帰ってくると門の外でウロウロしていました。いつどのように門の外に出たか確かめてみるとガレージのシャッターがしまる直前、30センチほどの隙間をヒョイとくぐり抜けて外へ出ていました。そして家のまわりでウロウロしていたのか、私が乗る車のエンジン音を聞きわけて、ヒョイと道路に出むかえにきていたのでした。身軽な「ジェリー」らしい業なのですが、挟まれたら大変なことになっていたでしょう。また「ジェリー」の勘の鋭さに驚いたことがあります。家の北側の道路を挟んだ向かい側に大きな市営の公園があります。毎朝そこで遊ばせていましたが、家の前に誰かの気配がすると、番犬のように吠えながら急いで家へ向かって走っていくのでした。

わが家の犬が「ゴロー」、「ロク」、「ジェリー」の三頭になってから、私は今までまったく気づくことのなかった犬の行動や気持ちに目を向けるようになっていきました。そしてそこで感じたことは、私たち人間とあまり変わることはない心理や行動でした。「ジェリー」は「ロク」がボスだと知ると、老犬「ゴロー」には見向きもせず「私はロクちゃんが好きな、あなたはアッチへ行っ！」という、意地悪い素振りを見せたときには苦笑せざるをえませんでした。

サンルームの出入り口に二頭引きのリードをかけてあります。綱の中ほどから二本に分かれて金

具がついています。「ロク」と「ジェリー」をいっしょに散歩させるために買ったもので右手で二頭引きのリードをもち、左手に「ゴロー」のリードを持って散歩することが日課となっていたのです。

いつものように散歩に出かけ二頭をリードから解放してやると、自由に放たれた鳥のように「ジェリー」は「ロク」の後について走りまわっていました。「ジェリー」という名前をつけてもらい、相性のよかった「ロク」と一緒に野山を駆けまわることができる、そのうしろ姿が楽しげでした。私は木陰で「ゴロー」といっしょに彼らを待っていると、逃げる狐を追いかけてすごい勢いで私の前を走り過ぎて行った様子におどろかされたこともありました。「帰っておいでー」と声を掛けると、彼らはすばやく戻ってきて「ハッ、ハッ」と息を切らせ、呼吸を整えながら獲物を追いかけてきたことに満足したらしく、もう私のそばからは離れようとしませんでした。こうして「ゴロー」が亡くなるまでの2年間、このグループの時代が続いたのでした。

ジャーマンシェパードを飼う



「ゴロー」、「ロク」、「ジエリー」と3頭になったことで、世話が大変というより、犬にも性格や癖など1頭だった時以上に犬たちを観察できる多頭飼いの楽しさを感じながら、私は、同伴犬にジャーマンシェパード犬を飼いたいという思いを次第に強くもつようになっていきました。そしてとうとう家族を説得してジャーマンシェパード犬を飼うことに決めたのでした。

幼い時目にしたジャーマン・シェパード犬、同じ犬でもどこか違う。怖いなど感じることはなく、警察官に連れられて堂々と歩いていた姿が印象的でした。私は父に「あんな犬を飼いたい」といったことをいまも覚えています。父はひとこと「あの犬は危ないから」と、それなのに後になって黒い秋田犬を飼ったのでした。どちらも大型犬で飼い方を間違えれば危険なことには変わりはないのですが、父は日本犬が好きだったのかもしれませんが。

ジャーマンシェパード犬はオオカミの姿かたちと似ているので犬の原種に近いと思われがちです。しかしこの犬種の歴史は浅く、ドイツのチューリンゲン地方、クローネ地方、ヴェルテンベルク地方などにいた牧羊犬を改良し理想を追求してできた犬種なのです。冷静沈着で高い運動能力と知性を持ち、さまざまな分野でその能力を発揮しています。

第一次世界大戦では犬の持つ特質（警戒、嗅覚、聴覚）を利用し効果的に使われていたようです。わが国でもドイツから多くのジャーマンシェパード犬を輸入して戦場におくっていたそうです。最近では湾岸戦争においても使われました。命の尊さをわかっていても犬の持つ力を利用してしまふ人間の気質に悲しい思いをさせられることもあります。

最近になってある方が「犬は畜生だから最終的には信頼できないのではないですか」と私にたずねられたことがありました。しかし私は三十数年犬と共に暮らしてきた経験から「犬は忠実でとてもいいパートナーになる最高の動物よ」と自信をもって応えたのでした。



あるブリーダーの犬舎で生まれたメスのシェパード犬「ユウ」（4ヶ月）は「ゴロー」が死んで三ヶ月後の1997年（H9年7月）にわが家にきました。

平和で穏やかに暮らしていた「ロク」と「ジエリー」にとって、身体のかな「ユウ」の出現は決して歓迎できる相手ではありませんでした。「ユウ」の悪戯は想像以上で、朝起きると必ず庭の植木鉢が倒され芝生は掘

り返されていたのです。そのダイナミックな行動に「ロク」は呆れて触らぬ神にたたりなしと顔をそむけていたし、三歳の「ジエリー」は「お前は最下位なのに生意気だぞ」と歯をむき出して牽制していました。身体は大きくても「ジエリー」に勝てないと思ったらしく、つねにゴメンナサイの低姿勢をとっていました。しかし「ユウ」は日ごとにシエパード犬らしく精悍な顔つきになり、「ロク」や「ジエリー」以上に体力や知力を発揮するようになっていったのです。

そのあり余る体力を伸ばすため十ヶ月を過ぎた頃から、私は原付のバイクで毎朝三キロほど走らせることにしたのです。速度を上げればそれに合わせてギャロップをする、スピードを緩めるとトロットに変速して、のみこみの速さと忠実な動きは驚くばかりでした。そのあと野球のボールを使って「待て」や「伏せ」「来い」などの服従心を遊びながら教えていきました。繁殖家たちの努力の結果すべてを兼ね備えた「ユウ」に新鮮な驚きと教えることの喜びを同時に感じていきました。

私が正式にプロの訓練士について、本格的にトレーニングを受け始めたのは「ユウ」が十ヶ月をすぎたときでした。入門に先だって、訓練所の所長さんから私がこれまで犬のシツケをどのようにしてきたのかを質問され、犬の扱い方も試されたのです。そして毎週一回、警察犬訓練所に通ってトレーニングを受ける許可をいただいたのです。それ以来、ワンボックス車に犬たちを乗せて週一度訓練所に通うようになりました。それが私にとっても「ユウ」にとっても運命の大きな転期となったのです。私は様々なことを体験し学ぶことができましたし「ユウ」は家庭犬の領域を超え、訓練犬として全国レベルの頂点へ昇って行ったのです。



毎週木曜日にトレーニングを受けるようになってから「ユウ」は服従の科目をことごとく完璧なものにしていきました。

犬の性格を理解して心理を読み、上手に教え導いていくやり方で、もちろんエサは使わずボールに興味を持たせるところからでした。実際犬をトレーニングするよりも、訓練士さんに解説をしてもらう時間の方が長かったように記憶しています。

そして私の指示をうれしそうに聞いてくれる「ユウ」に成長変化していったとき、それは私が幼いときに抱いていた、言葉を持たない動物と意志の通じあいを感じることができる喜びに変わっていったのです。

数カ月たったころ、所長さんから「一度、競技会に出てみませんか」と勧められたのです。私が犬の訓練を習い始めた動機は、「ユウ」と先住犬をつれて山歩きや、いろんなところへつれて行ってやりたい。そのためにも完全に犬をコントロールできる飼主になろうと思ったからで、競技会に出ようとは考えていなかったのです。しかし所長さんから「現在の自分のレベルを客観的に評価してもらおうと、新しく次の段階へ進むことができますよ」と説得されて勧めに従うことにしたのです。

日ごろのトレーニングの成果を審査員に評価してもらう場として、「日本警察犬協会（PD）」や「ジャパンケンネルクラブ（JKC）」が主催する競技会が各地で行われています。私のはじめて参加したのはJKC主催のCDII（家庭犬中等科）レベルの競技会で、規定七課目と自由選択三課目、あわせて十課目について審査される競技でした。

当日、河川敷に設けられた会場周辺には競技会に出場するため訓練犬を乗せて集まった車両がずらりと並んでいて、あちこちでエントリーする犬をウォーミングアップさせている姿が見られました。どの指導手も犬に対する発声は自信に満



ちて、それに呼応する犬たちの動きもキビキビして充分訓練されていることが分かりました。



私は、自分をはじめでの出場でも「ユウ」はいつも練習している通りやってくれると思って心配していませんでした。出場する前のウ

オーミングアップは所長さんがやってくださったし、エントリーしてからの犬の扱い方、審査員に申告するときの態度、終わった後の注意点などを何度も繰り返して教えてもらっていたので、私はすべてパーフェクトにできると思っていたのです。

しかし出場するために待機場所へ進んだころから「ユウ」に落ち着きがなくなってきたのです。励ましなだめてもいっこうに効果がありません。徐々に順番が近づいてくるので、私の方が焦りはじめてしまったのです。とうとう私の出番が来てしまいました。緊張しながらも教えられた通り審査員に申告し「ユウ」を私の左脚につけ、出発地点から脚側歩行を開始したのです。リードを持つ手の感触が重く感じられ、コーナーを曲がるときにも私の横にピタリと付かないので、リードで引き寄せるように調節すると首輪についた金具が「カチャ、カチャ」と音をたて、審査員が減点チェックをしている様子を感じたのでした。

もはや私は「ユウ」を気遣う余裕すらなく、課目の順番を間違えないようにするだけが精一杯で、かろうじて前半の犬を座らせる位置までたどりつくことができたのです。そして今度はオフロードで私の左脚横につけさせ、まっすぐ歩きだし、その次右へ曲がるコーナーにさしかかったとき、突然「ユウ」は私の側から離れて、会場に張られたロープを跳び越え、遠くの方で応援していた夫のところへ一目散に走って逃げていったのでした。逃げられれば「失格！」その間わずか二、三分、なんとお高い出場料になってしまったことか・・終わったあと、所長さんから「逃げられましたね～」とからかわれ随分落ち込んでしまったものです。

日ごろ正確に科目をこなしていた「ユウ」でもステージが違うと思わぬ行動をとってしまう。信頼できる犬に成長していると思っていたのも独りよがり、で、「ユウ」の気持ちを考えて指示と行動をしていなかった自分の未熟さを思い知らされた競技会でした。

二頭目のシェパード犬はオス



1998年（平成十年）七月、いつものように「ユウ」を連れて訓練所へいったのでした。

「ユウ」の訓練性能は驚くほど優れていて、新しく教えることはたいがい二回ほどで覚え、教え方に苦勞することはありませんでした。

一歳を過ぎていた「ユウ」はすでに「ダンベル持来」、「障害飛越」など、競技種目を完全にマスターしてCD I（家庭犬初等科）、CD II（家庭犬中等科）の家庭犬訓練試験を受けて「優」の評価をもらっていました。その後、何度か競技会に参加させてもらったのですが、逃げられるといった同じ失敗をすることはありませんでした。また奈良で行われた訓練競技会では「I部臭気選別」でチャンピオンGを獲得することもできたのです。

その日、所長さんから「ユウの訓練はできるようになったけれどオスとメスでは訓練のやりかたが違うのです。あなたのためにオスのシェパード犬を用意してありますから見に行きましょう」と言われたのです。それ以前にも、何度かオスとメスの両方飼うことを勧められてはいたのですが、シェパード犬を二頭飼うなんてとても無理だと思っていたのです。しかし「ユウ」を訓練し、育ててみて、ジャーマンシェパード犬の魅力に感動していたのでした。「犬のサラブレッド」と称されるだけあって、優れた訓練性能を持ち、飼い主への忠実さに眼を見張るものがありました。だからオスのシェパード犬で挑戦してみたいという気持ちもあったのです。所長さんより子犬を見せてもらい「名前はきまりましたか」と突然尋ねられたときに「よし！オスのシェパード犬を訓練してみよう」という決心に変わっていたのでした。

「シュンという名はどうでしょう」と応えた私に、「シュン、シュン・・・ユウとシュン・・・優駿か～ いい名前ですよ」で、きまりとなったのでした。馬ももちろん好きだった私は、実際身近に芦毛のメジロマックイーンをはじめ、当時活躍していた馬たちを見せてもらったことや、作家、宮本輝の小説「優駿」で馬にかかわる人たちの馬への思いとその生き様を読んでいたので「ユウ」の次は「シュン」と瞬間的に口から出たのでした。

所長さんから上手に誘導されたような感じで、そのまま家へつれて帰ったのが「駿（シュン）」だったので。はからずも雌雄二頭のシェパード犬を飼うことになってしまったわけですが、犬仲間からは交配するために飼ったと思われたようです。交配するためではなく、訓練をとおして犬と信頼関係を築いていく面白さと、信頼する訓練士さんから勧められたからだったので。



「シュン」は生まれて五十六日でわが家に来たのでした。

先輩犬「ロク」「ジェリー」「ユウ」に全く臆することなく貫禄充分で、「新参犬だなおまえ！！」と「ジェリー」に威嚇されても、「シュン」は反撃するほどの度胸を持って

ていました。まだ耳は垂れてボリューム感のある柔らかなうぶ毛に包まれていました。手足は子犬にしては不釣り合いなほど太く、やっぱり将来かなり大きくなるだろうと予測ができました。そして「ユウ」と同様、植木鉢の花はすべて枯らし鉢だけがたまっていくありさまでした。



六ヶ月を過ぎると、うぶ毛から大人の毛並みに生え変わり、顔や身体全体は真黒な体毛に覆われて、見るからに怖わそうな風貌になっていきました。飼い主からすればやんちゃ盛りの甘えん坊でしたが、外へ出て他の犬に出会うと、すでに吠えかかりすごい力で引っ張るので、私はかなり強い調子で叱っていました。ズボンの裾にじゃれつき跳びかかってくる勢いは薄手のズボンなら破られそうになるほどでした。蹴り跳ばしても、素早く身をかまし、猛然とくらいついてくる強烈さに、こちらが怯みそうになるほどでした。さすがにオスは違う、とこのときつくづく感じたものです。こうして私は「シュン」の訓練に取り組むことになったのでした。



訓練の基本はまず犬を飼い主と上手に歩かせる脚側歩行練習から始めます。

「ユウ」と同じように脚側歩行からはじめたのですが「シュン」の場合は「ぼくくんれんきらいだよ～なぜこんなことをさせられるんだ～」と脚側歩行をさせても仕方なくついてくる態度でした。ボールを使ってみても興味を示さないで「ユウとまったく性能が違う！うまくいかな

い～」と嘆く私に、訓練士さんは「悩んでください」と課題を持ちかけられたのでした。そして「動かない犬には、飼い主が犬以上の動きをしないとついてきませんよ」とのアドバイスでした。なるほど、訓練士さんたちの動きを見ていると、上手に犬のテンションを上げ下げして注意を自分にひきつけ集中させていました。

つぎに「シュン」に座れと号令をかけると「しているけどめんどくさいな～」とゆっくりと座る。「伏せ」の号令では「ハイ、ハイ、ふせしたついでにくさでもたべようかな～」と目の前に生えている草を平気な顔で食べる。その様子に訓練士さんは笑いながら「伏せ」の姿勢をとっている「シュン」のそばにあるダンベルを、静かに近づいて取り上げようとする、顔をにらんで「ウー」と唸り声を発したのです。「このまま放っておくと、誰も近寄れない犬になるかもしれませんよ」と脅かされたのでした。

こんどは「シュン」におやつをみせながら脚側を試してみました。

とたんに、これが「シュン」なの？と見違えるほど私のそばにピタっとついて「はやくおやつをちょうだい、おやつを」と敏捷な動きにかわるのです。なるほど、おやつを使って訓練をすると私の労力はほとんどいりません。しかしこのやり方は犬の尊厳を無視したやり方といえるでしょう。人を見抜く能力をもち知能もたかい動物ですから逆に飼い主のほう操られることになってしまいます。

次は呼び戻しの訓練です。「シュン」に「来い」と号令をかけても素早く来ないので「チャリン」と音の鳴るチェーンを「シュン」のからだに力いっぱいぶつける方法をとります。痛くはないのですが、突然思わぬところから鎖が飛んで来るので、驚いた瞬間にサッと立ちあがって動きだします。そのタイミングを見てもう一度「来い」と号令をかけ、来たときにタイミングよくほめるのです。訓練の効果をあげる非常手段として覚えておく必要があります。これを「投鎖（とうさ）」といいます。手本を見せてくれた訓練士さんの迫力は可哀想と思えるほどでしたが、チ

チャリンと音がして号令のタイミングやほめるタイミングで「シュン」の態度が一変したのです。確かに「ユウ」と「シュン」では性格の違いはありますがメス以上にオスの場合は抑えるだけ抑えて普通の訓練された犬になると知ったのでした。性格の大胆な「シュン」は少々の厳しさに逃げ出すことはありませんでした。

犬のしつけは、叱るときは毅然とした態度で叱り、褒めるときはオーバーなくらいに「よしよし偉かったね」と身体をなでて褒めてやる。この「アメとムチ」の両方の使い分けがとても大切で、どちら一方が強すぎても効果はなくそこには犬への愛情が何より大切なのです。

それ以来「シュン」は訓練に集中するようになり、ノロノロしているときは、手に持っているチェーンの音を「チャリーン」と鳴らすだけで、「おかあさん、わかったよ」と私の横にピタッと付いて次の指示を待つ忠実さに変わっていきました。

かつて、暴れ馬を軽トラックの後ろにつないで走らせ、馬をおとなしくさせる調教をしている様子をテレビで見たことがあります。動物愛護団体の方が見れば眉を逆立てるかもしれませんが、訓練は人と動物とのかけひきのようなところもあり、こちらが敗ければもう二度と言うことを聞かなくなってしまう場合もあるのです。それは双方にとって不幸なことで、やはり飼主が犬の良きリーダーになることが大切なのです。

10ヶ月を過ぎてから「シュン」も脚力をつけるためバイクで走らせました。対向から散歩してくるどんな犬に出会っても、ひたすらバイクにあわせて走ることに集中していたので、他の犬に向かっていく危さはありませんでした。こうして私の訓練の成果が徐々にあがっていったのでした。

私がシエパード犬を2頭つれている姿を見られた方は、リードを離されたら大変だと心配された方がおられたかもしれません。しかし私は「ユウ」も「シュン」も訓練しこのような時はどうゆう行動をとるか緊張感があっても彼らを信頼していましたので、不安な気持ちはありませんでした。その後、道で人に出会っても「賢くて、おとなしいですね」と言われるようになったのです。

犬はこの地球上にヒトが存在する以前から群れをつくり狩りをし獲物をとって種をつないできました。生き方では先輩といえるでしょう。そして忠実さをもって人と共存共生することを選んできた彼らを裏切ることなく深く理解していくこと、そこからおのずと接し方も気づかされるものです。言葉を持たない動物と心を通わせ信頼関係を築くことができるとおのずと幸せな気持ちになるものです。

ユウは訓練競技会を目指す



私が指導を受けていた訓練所の所長さんは、人であれば文武両道、犬でいうならば姿は標準に近くバランスがとれていること、なおかつ訓練も練り鍛えあげられている両立犬を育てていくことを目指していました。

たとえば立ち姿がきれいでも、審査員が固体審査をするときに「ウーッ」と唸り声をあげたり、じっとしてられなくて逃げだそうとする犬や訓練のなされてない犬のことなのです

ある日、私が「ユウ」の訓練をしていたとき、所長さんが私の前へ来られ非常に礼儀正しい態度で「ユウを訓練所に預けて、私に「ユウ」の訓練をさせていただきませんか。「ユウ」は立ち姿もきれいだし訓練性能を磨けばもっと伸びる力を持っています」と言われたのです。

家庭犬としてしつけができていれば十分で、私自身それ以上「ユウ」に求めていませんでしたが、その言葉を聞かされたとき「あなたの息子さんはすごい才能を持っていますから、もっと伸ばしてやってくれませんか」と言われたように感じて、プロの訓練士さんに預けて持っている能力をどこまで伸せるかお願いしてみようと気持ちが動いたのでした。

「ユウ」はその翌日から六ヶ月間の訓練所生活を送ることになったのです。そして「最初の一ヶ月間は会いに来ないでください」と言われたのでした。飼主としては時々会いに行って、どんな風に訓練されているのか見届けてみたいと思ってしまうものですが、新しい生活に慣れるまでは、飼い主をみると甘えが出てきて訓練にみが入らなくなってしまうからなのです。「犬はひとつ妥協すると次の段階を要求して自分の思いを通そうとする習性を持っています。一見可哀想と思えても犬は飼い主を忘れることはありません。寂しいかもしれませんが訓練に集中させてやってください」と言われたのでした。

犬はけっして飼い主を忘れない



訓練所生活を送るようになって一カ月が過ぎ、私は「シュン」のトレーニングを兼ねて訓練所へ通っていたのです。その間、「ユウ」は私と出会わないように時間を変えてトレーニングをされていたようでした。

ある日、所長さんより「ユウの訓練姿を見てください。随分成長しましたよ。今つれてきますから、わからないように遠くで見てください」といわれたのです。

久しぶりに訓練している様子を「ユウ」に気づかれないように遠くのほうで見させてもらいました。体は引き締まり、動きもきびきびとして楽しそうに尻尾を振りながら服従の規定をこなしていました。

訓練所生活は一段と落ち着きと集中力を増したようにおもえました。

投げられたダンベルを指示に従って取りに行き啜えてもどってくる。そして「出しなさい」といわれたらすぐ出す。それまでは、ちゃんと啜えていなければならない。この訓練の土台があって「臭気選別」ができるようになるのです。

「ユウ」がプロの訓練士さんから訓練を受けている様子を見学させてもらいましたが、じつに健気とも思える訓練風景でした。そして訓練が終わってから「ユウ」は繋がれていたリードをはずしてもらおうと、一目散に私の方にむかって走ってきたのです。やはりいつもと違う雰囲気や様子を敏感に感じて、私が遠くで見ていることに気づいていたようでした。

そんな様子を見て所長さんは「訓練士は所詮自分の犬をもてない悲しさがあります」と語った言葉が印象的でした。どんなに「ユウ」が訓練士さんを慕っていても、飼い主との絆には勝てないようです。だからこそ、家族同然のなくてはならない存在を占めていくのであらうと思います。

大きくシッポを振って跳びついてくる「ユウ」を抱き取って「よくがんばってるね」と身体を叩いて褒めてやり、それからしばらくボール投げをしてあそぶのです。やがて犬舎へ帰る時間がきて名前を呼ばれると、そのときは素直に背を向けて帰って行くのでした。自分はいま飼主から離れて訓練を受けていることを自覚しているようでした。

何事もなかったように去って行く「ユウ」に「また来るからね～」と見送ったものです。



毎年十月に長野県霧が峰高原において、日本警察犬協会主催の「日本訓練チャンピオン決定競技会」が開催されます。科目は「警戒の部」「臭気選別の部」「足跡追及の部」があり「ユウ」は「臭気選別」の訓練をしていました。

出場するには「臭気選別 P A H III」の資格試験に合格しなければならないのです。試験当日、臭いを嗅ぎわけ布を咥えて戻っていく「ユウ」の様子を遠くから見せてもらいました。後で聞いたことですが、審査員の方が割り箸を入れる細い紙筒に親指の先を押し付けて、それと同じ臭いを探してくるように言われたらしいのです。練習したこともなく果たして「ユウ」はできるだろうかと心配したそうですが、正解で臭いの嗅ぎ方は素晴らしいと評価をもらったのでした。「優V」の成績で合格証書を授与され、それ以降「霧が峰」に向けて臭気選別訓練の拍車がかかっていったのでした。

いつものように「シュン」の訓練をかねて「ユウ」の面会に行った時のことでした。

「できるだけ大勢のひとの臭いを嗅ぐ経験を積ませたいので、娘の通園している園児たちに新しい靴下を買って取り替えてもらった」と所長さんからきいたのでした。そして8月には集中力をつけるために強化合宿訓練をするとまでいわれたのでした。今ではその方法がどんなふうになされるか、そして犬に集中力をつける訓練方法があることも理解できるようになりました。

しかし当時の私は人間同様、大学入試なみに夏季講習特訓をしてどれほどの効果があるものなのかと、今思えばまだまだ訓練の深さを理解していない私自身の浅薄なおもいでしかなかったのです。

理解と経験のないところには創意工夫も生まれません。目標にむかって努力をしている所長さんの様子に、私も新しい靴下を調達し、知り合いの人に履いてもらい密閉した袋に入れて持参することにしました。「嫌なやつのおいだ！嗅ぎたくない臭いだと思われるかな～名前は書かなくていいの？」と冗談を言いながら随分沢山の方にご協力をいただいたものです。

それからしばらくして所長さんより電話がかかってきたのです。

「履いた形跡のない靴下を袋に入れてあるが、臭いがついている靴下かどうか」との問い合わせでした。その靴下はお願いした方が履かないで半日身につけていたものであることを伝えたのですが、注意深く慎重にそして毅然とした中にも愛情を持って犬たちを訓練している様子をうかがい知ることができました。人の臭いが付いていない靴下に臭いがついているとおもって訓練に使ってしまうと犬は迷ってしまい、せっかく積み上げてきた共同作業も一夜にして崩れ去るからなのです。



一九九九年（平成十一年）十月、長野県霧が峰において「日本訓練チャンピオン決定競技会」が行われました。数日前から「ユウ」は出場する犬たちと現地に向けて出発をしていました。われわれは「ユウ」が会場に出場する日時に合わせて、応援組四頭（シュン、ラク、ロク、ジェリー）を車に乗せて出発したのです。

十月半ば過ぎの霧が峰は寒く四頭の犬たちの寝ている車窓はくもっていました。

翌朝、現地で出会う犬たちは、ほとんどGシェパードとラブラドルばかりで、ときおりドーベルマンやゴールデンレトリバー、エアデールテリアを見かける程度でした。どの犬も指導手の指示に集中して、さすが鍛えられた犬たちばかりの競技会場なのだと感心させられました。ましてや人や犬に吠えかかる犬は一頭もいません。みな堂々としていました。「霧が峰は特別のステージだ」と聞いていましたが、経験を重ねた訓練士と訓練で練り鍛えた犬たちとの競技会に相応しい雰囲気だったと思いかえすのです。千頭以上はいただろうと思われる雰囲気の中なかでも応援組四頭（駿、楽、ロク、ジェリー）は全く動じることはありませんでした。



そして二〇〇〇年(平成十二年)「ユウ」三歳のとき、再び霧が峰に出場したのです。難易度が高くほとんどの犬は予選で落ちてしまうことが多い中で、今回予選をクリアし最後の決勝戦七頭の中に残ることができたのです。

「霧が峰」と地名がついているとおり最終決勝戦ころから濃霧が発生して、うっすらと指導手の姿と「ユウ」を確認することはできたものの十メートル先にある選別台までの視界は白く霧に閉ざされなにもみえない状態でした。

臭いだけを頼りに選別台のところまでたどりつこうとする姿は見失った飼い主を健気に捜す忠実さそのものにも感じさせられました。応援していた我々の方が寒さと疲れでへとへとになったほどでした。

こうした悪条件にもかかわらず「ユウ」は集中力と持久力を失わず、能力を十分に発揮させることができたのです。夏の特訓で積み重ねた成果が荣誉あるガウンと称号証を頂く結果となったのだとおもいます。すべてが終わった後「おつかれさま」と「ユウ」をねぎらい、ヴィーナスラ

インの見える広々とした草原で連れてきた犬たちと思い切り自由に遊ばせたのでした。



ある目標に向い訓練を通して成長していった「ユウ」を振り返るとき、犬は訓練次第で人間の意志を感じてかなり高い能力を発揮できると知ったのです。それは、私に犬という動物を深く理解するきっかけを与えてくれたばかりでなく、家族の一員として最高の伴侶となる動物であることも感じさせられたのでした。



私が「ドッグランを作りたい」と具体的に思うようになったのは、二頭のシェパード犬の世話をするようになったころからでした。もちろん、それまで何度も犬を自由に遊ばせる場所があったらいいなとは思っていました。

動物愛護法では飼主の危害防止の義務として犬の放し飼いを禁じています。私の場合は野放図に放しているつもりはないけれど、このままでは犬たちが運動不足になるし、リードをつけて散歩するだけでは犬も楽しくないだろう。飼い主も犬も楽しく過ごせる犬ライフにしたいとの思いだったのです。

それに大型犬四頭、その内の二頭が元気盛りのシェパード犬の雌雄ですから、到底海外旅行などいけるはずもなく、そこでどっぷり犬との生活に浸って、ワンランクアップした犬ライフを送るため本気でドッグランを作る計画をたてたのです。

そう決心してからまもなく、ある知り合いの方から一四〇〇坪の土地を紹介していただいたのです。

しかし、その目的が犬を遊ばせるためだとわかると、その貸主の人たちは、「そこまでして犬を遊ばせなくてもその辺で遊ばせればいいのか」と、また「ドッグランってなに?」、それも、一主婦が犬ごときものを遊ばせるために土地を借りてまで作るのかと不信がられ、なかなか理解してもらえませんでした。

それから一年後ようやく借りることができたのでした。

わが家から三〇キロほど離れていたけれど、その場所は周辺に人家はなく、三方を山に囲まれた盆地で、昔は畑地だったらしいのです。人の背丈を越えるほどの雑草が繁っていて、雑木や石ころも多く、犬たちを快適に走らせられるようになるまでに、用地の契約や整備を含めて、それからまた一年ほどかかりました。



周囲にフェンスを張り、トラックが出入りできるように両開きのゲートを設け、山から湧き水を引いて、犬たち専用の水飲み場や小さなプールもつくりました。犬仲間と弁当を食べたり休憩するためのプレハブのハウスも建てました。

見渡す限り自然が豊かな場所で、道路を挟んだ向かい側には小川が流れていて、夏はホタルが乱舞し、周囲の山々にはカブト虫やクワガタが生息している環境でした。

わたしは連日、犬たちを車に乗せてドッグランに通い、そして思う存分走らせ、犬たちを遊ばせました。

特に「シュン」の走りはダイナミックで、自転車で走る私の後を追いかけてギャロップする姿が今も脳裏をかすめます。時には泊りがけで行ったこともありました。



この場所をあえて公開しないできましたが、いつの間にか犬を通じて多くの方々の集まりの輪が広がりました。日曜日には犬仲間が大勢家族ずれで集まって、犬と走ったり暑い盛りには川で水遊びをさせたり、人も犬も自然の中に開放されて、ドッグライフを満喫することができたのです。そのようにして約五年間、片道三〇キロかかるドッグランへ通い続けた

のです。

わが家の犬たちも最盛期を過ぎて、長老の「ロク」には三〇キロの道のりが負担になってきた頃、再びわが家から車で一〇分ばかりのところへドッグランを移転することになったのでした。

かつて私が乗馬クラブに通っていたころのオーナーさんが所有する場所で、小高い丘の上に広がる草原を借りることになったのです。同じように周囲をフェンスで囲い、休憩所や犬たちが遊ぶ設備を作ったり、再び振り出しからドッグラン作りに取り組んだのでした。この場所も周囲の山々を見渡せる自然に恵まれた景勝地で私は今ここで「犬のしつけ教室」を行っています。

ラブラドルレトリバー



一九九九年（平成十一年）のある日、夫と私がお世話になっていた訓練所を訪れたとき、所長さんと次のような会話が交わされたのでした。

所長「可愛いラブラドルの子犬がいますから、よかったら一頭つれて帰ってください」

私「とんでもない！うちにはシェパード犬が二頭とミックス犬二頭、合わせて四頭もいるのですよ。大型犬五頭も飼うなんて、絶対無理ですよ！」

そんな私の言葉をなんら解することなく、所長さんは私と夫を子犬の入れてあるサークルのところへ案内したのです。

生後二ヶ月の子犬はサークルの中で、「抱いて、抱いて」といわんばかりピョンピョン跳びはねていました。

夫「ワー可愛いな〜」

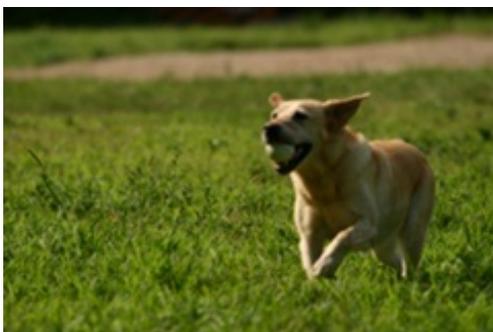
私「可愛いことはわかるけど、もう一頭飼ったら本当に犬屋敷になってしまうじゃない。ご近所に迷惑もかかるし絶対反対よ！」

所長「どの子犬も最高の血統書のつきたいい犬です。どうぞ一頭差し上げますから連れて帰ってください」

私「大型犬五頭飼うのは無理です！」

夫「ほんとうにつれ帰ってもいいんですか？」

そういえば、私がシェパード犬を飼いたいと言ったとき、夫は「ラブラドルのほうがいいのではないか」と言っていたことをおもいだしたのでした。



所長「いいですよ〜、是非つれ帰ってください」

私「五頭の世話は無理ですよ！」

夫「いいじゃないか、つれて帰ろうよ」

不思議なペースに巻き込まれて、いつの間にかラブの子犬を選ぶことになってしまったのです。

最初にサークルから出てきた子犬は、際立って大きい体格をしていて、持ち上げた感触はどっしりして脛が下がっていました。

所長「その子犬は少し大きすぎるから、もう少し小さい方がいいですよ」

私「じゃあ、どのこにしようかなあ〜」

私はいつの間にかその気になって、サークルから出されてすばしこく動きまわる子犬たちを追い

かけていました。

私 「サ～捕まえた、この子犬にしま～す」

所長 「そのこならいいでしょう。もし家の中で飼うのなら、ジュウタンを敷いてください。フローリングは滑って股関節によくないし形が崩れますから。でも外で飼うなら問題ないです」

このように所長さんの巧みな話術に乗せられて、つれて帰ったのが「ラク」でした。

けがれの無い、ラクラクちんな顔をしているところから「楽（ラク）」と名づけたのでした。



犬種名はラブラドルレトリバーで、原産地はイギリス。主として水鳥の狩猟犬として活躍し、いまや盲導犬、救助犬、介助犬、麻薬捜査犬など広範囲で人の役に立っています。飼ってみると、シェパード犬にはないフレンドリーさと愛らしさ、穏やかを持っていて、いつかわが家のアイドル犬として、欠かせぬ立場

を占めるようになっていきました。



猛暑が続いた八月のある日、久しぶりに犬たちを海で泳がせるため、早朝に家を出発して日本海にいったのでした。

犬たちを海へ連れて行くと、もっとも喜ぶのは「ラク」なのです。沖に向かって力いっぱいボールを投げてやると、飛び込んですいすい泳いで見事にボールを啜えて戻ってきます。

「ラク」がまだ一歳を過ぎてまもない頃でした。

海辺に沿ってコンクリートの防波堤の上を一緒に歩いていると、一メートルほど下の海に飛び込んでしまったのです。水を見ると見境もなく飛び込む癖がある「ラク」なので、それほど驚いたわけではないのですが、ひと泳ぎをして海面からとび上がろうとするけれど、あまりにも高く、それに体がぬれて重くなっていることもあり、何度も失敗をしてしまったのでした。これでは疲れておぼれてしまうと飼い主の方があわててしまったのです。

困っている「ラク」を大声で近くに呼び寄せ、腕を伸ばして首輪をつかみ、何とか陸に引き上げることができたのでした。もし手が届かなかったら、大騒ぎをしていたかもしれません。

このように、「ラク」は海や川を見ると、無鉄砲なほど、水の中へ夢中で飛び込んでいく習性を持っているのです。手足を櫂のように動かし、オッターテイルと呼ばれるかわうその様な尻尾で舵を取り、水中でくるっと方向転換する。疲れると泳ぎをとめて水面から顔だけ出し、ぼっかり浮かんで休憩をしている。この「ラク」の泳ぐ姿を見ていると、水鳥の狩猟犬といわれる理由が納得できたものです。



訓練所で生まれた「ラク」は、持って生まれた性格と育った環境が影響しているのでしょうか、初めから犬同士のつきあいかたをよくわきまえていました。

大型犬ばかり四頭いるわが家に新参犬として入ってきたときでも、ひたすら低姿勢であいさつをしまわっていました。先輩の犬たちから「お前は何物だ！」と、鼻の先で押し倒されたり臭いを嗅がれたりしていましたが、怖がりもせず愛想をふりまいていました。

散歩の途中で他の犬に出会うと、自分の方から挨拶に行き、自分より小さな犬に対してでも目線を低く平身低頭の態で自分をアピールしていました。「わたし、ラクです。ヨロシクね、ヨロシクね」といった具合ですから、誰からも意地悪されることはありませんでした。また、どんな人にも尻尾を振って甘えるように摺りよっていくものですから、誰からも「まー可愛い」と言って可愛がられもしました。世渡りが上手といえば語弊がありますが、生まれながらにしたたかに生きるコツを掴んでいると思ったほどです。

ボールを投げてやると、夢中になって追いかける集中力、遊戯心、従順さ、その行動は「静と動」を兼ね備え、驚くほど呑み込みの早い犬でした。一年経ったころには、服従訓練の科目にある「ダンベル持来」や「障害飛越」も簡単にマスターしてしまっていました。

ドッグランで開放してやると、「ラク」はいつも仲間たちと追いかけて遊ぶのです。いつも追いかける役は身軽な「ジェリー」で、そのあとを「ユウ」が追い、次に「シュン」が追いかけて、「ラク」はその後に続いて走っていました。

狙った獲物を追いかけるように、体高を低くして走る「ユウ」、ダイナミックに走る「シュン」、そのあとを弾丸のように走る「ラク」。仲間を追いかけて遊ぶのは、かつてそのようにして獲物を狩ってきたDNAの名残りではないかと思います。

私はしばらく彼らの走る様子を見てから「ユウ」と「シュン」を呼び止め、「ラク」と「ジェリー」だけで走らせます。走り疲れると「ジェリー」は私の近くで待ったをかけるのです。すると追いかけていた「ラク」も走りを止めて一息入れます。

そして「ジェリー」が再び走り出すのを待って、大きな樹を挟んで右へ行ったり左へ廻ったりして「ジェリー」と追いかけてっこをするのです。



こうして「ラク」の成長過程を観察してみると、シェパード犬とは違った優れた訓練性能をもっていて、プロの訓練士から警察犬に育てたらどうかと打診されたのです。しかし、すでに「ユウ」を訓練所に入れていましたので、二頭の犬を同時に預けることは経済的に負担でもあり、「ラク」は訓練競技会ではなく、体型審査の展覧会に出させてもらうことにしたのでした。

ラクは展覧会の優等生



動物の展覧会のルーツは十九世紀ギリスではじまりました。競争馬の改良のため血統書概念をつくり出し、改良の成果をあげたことにより、犬にも犬種の純血保持と改良と普及を目的として展覧会が開催されるようになったようです。

現在犬種は数え切れないほどありますが、人の手によって淘汰と繁殖が重ねられ現在の犬種と公式標準（スタンダード）

ができあがりました。

日本警察犬協会（PD）主催の展覧会（審査会）では、警察犬種指定七犬種（ジャーマンシェパード、ラブラドルレトリバー、ゴールデンレトリバー、コリー、エアデールテリア、ドーベルマン、ボクサー）の公式標準を物差として牝、牡、年齢別に分けられ「固体審査」（骨格構成、健全性、表情、気質、等）と「比較審査」が行われます。

一九九九年二月、「ラク」が五ヶ月のとき、幼犬特組クラスで展覧会（審査会）に出陳させてもらうことになったのです。歩き方や立ち姿のマナーを訓練するため一ヶ月前から訓練所に預けることになりました。審査員に最高のみせ場をつくるのも、ハンドラーである訓練士さんの技量にかかっているのです。審査員の前で一頭ずつ固体審査を受けたあと、年齢別に別けられた犬たちが一列に並んで、直径五十メートルくらいの円周を歩いたり走らされたりします。その走るときの歩容や立ち姿で比較審査が行われます。

まだ四、五ヶ月の仔犬たちがリンクを走る場合、時として後ろからついてくる犬に振り向いて遊ぼうとしたり、前の犬にちょっかいを出したりして、幼稚園のお遊戯会のような、何かほほえましい感じでした。



前を向いて堂々と軽やかな歩容で走らせるには、時として飼い主の呼び声が大きく影響することがあります。展覧会（審査会）会場まで出向き、大声で「ラク」の名前を呼んで上手に走らせるようにしたものです。最初はどの場所で声をかけたらいいいのか、まったく要領をつかめない私でしたが、タイミングを見て「その場所じゃない！」「いま名前を呼んで！」などと注意されながら、離れたところから「ラクちゃん、こっち、こっち、がんばってー」と、エキサイトして応援をしたことが楽しい思い出となっています。それらは単に家で犬を飼っているだけでは、到底味わえない快感でしたし、訓練競技会とは異なり、緊張することなく楽しめる時間でした。

「ラク」に関する面白いエピソードがあります。

「シュン」「ロク」「ジェリー」「ラク」をつれて「ユウ」が出場する訓練競技会の応援に行ったときのことでした。現地に到着して車からみんなを降ろすと、「ラク」は「私の出番はどこ？どこへ行ったらいいの？」という素振りを見せた様子に、なんとこの「ラク」はナルシスレディなのかと苦笑せずにはおれませんでした。励まされ、ほめられながら、とにかくスマートにリンクを走るだけでいいのですから「ラク」にとって、こんなにうれしいことはありません。

「今日はラクちゃんじゃなくて、ユウちゃんの応援よ」と教えたのですが、何度も晴れの舞台に立ってきたので、今日もガンバロウと張切っていたらしいのです。「ラク」は展覧会（審査会）で大勢の犬たちに交じってもまったく物怖じなどありませんでした。何度かの展覧会出場で得た自信がそうさせたのでしょうか。もともと人にアピールする天性の素質を備えていたことも影響していたのだと思います。

そしてラブラドル単独展や展覧会（審査会）に出陳し、最後は東京の江戸川河川敷で行われた日本チャンピオン決定審査会で「日本チャンピオン」に選ばれたのでした。

そのとき「ラク」の審査評価は次の通りでした。



「本犬は色素の濃い女性らしい顔貌を持ち管理の行き届いた牝犬である。頭部は頭蓋の幅がありストップが明確で性相表現、種的表現ともよい。構成は四肢の角度がよく、後肢は大腿部の幅もあった。カプルドは適度の長さで、コートはよいコンディションであり、尾はオッターテイルで、太さ、長さとも良い。今後も引き続き良管理を期待します。」

そして、このあと「ラク」は出産を経験したのでした。

ラクの子供が誕生



二〇〇二年（平成十四年）「ラク」三歳三ヶ月のとき、六頭の仔犬を出産しました。そのころの観察記録です。

二〇〇一年（平成十三年）

- ・八月八日： 「シュン」が「ラク」のお尻の臭いを嗅ぎ始める。犬の嗅覚はすごいと感じる。
- ・九月六日： 「ラク」二歳十一ヶ月、体重二七、四キロ。

「シュン」は「ラク」にマウンティングしようとするが「ラク」はすごい勢いで立ち向って「シュン」を攻撃する。こうゆう時の「ラク」は強い。「シュン」は懲りずに何度もアタックする。

- ・十一月十一日： 「ラク」に発情の気配。ようやく飼い主にもわかる状態になる。
- ・十一月十六日： 訓練所で「ラク」は人工授精を受ける。相手は「スタンレータイム」全国大会で二年連続優勝した牡のラブラドル。
- ・十一月十九日： 自然交配成功
- ・十一月二十一日： もう一度人工授精を受ける。

もし着床していれば、犬の受胎日数から計算して、予定日は翌年の一月十八日、二十一日、二十三日のどれかと獣医師より告げられる。

- ・十二月七日： 病院でエコーを撮る。三頭の子犬の姿をうっすらと確認できるが、見なれない映像はわかりにくい。

獣医師から三頭という数は不自然だから、もう少しいるでしょうといわれた。

二〇〇二年（平成十四年）

- ・一月二十一日： 「ラク」は朝から何度も便意を催すような姿勢をとっている。

部屋の中をうろうろしていた。そして十二時五十分に第一子誕生。猫のような鳴き声で鳴いている子犬を不思議そうにみているだけだった。私は子犬に「ラク」の初乳を飲ませるようにあてがってやる。その後、十時間かけて六頭の仔犬を出産した。産まれるとまず初乳を飲ませ、その後私は子犬の体重を計り臍の緒を糸で結んでやる。

体重は三八〇グラム～四七〇グラム。

「ラク」は子犬の身体を懸命に舐めまわしている。それは排尿を促すためでもあるらしい。出産中は他の犬たちと隔離するため、ひと部屋を「ラク」の分娩室とし、部屋のすみをサークルで



囲み、その中に毛布を敷いて子犬たちを寝かせた。

子育てをする「ラク」は





じつにかいがいしく、まだ眼のあいてない子犬を鼻先で次々に押しやって、一頭づつ全身をくまなく舐めまわし母性本能そのものだった。



先住犬の「ユウ」や「シュン」、「ジエリー」たちが、子犬の臭いを嗅ぎつけ興味を示して近づこうとすると、「ラク」は子どもたちの前に立ちはだかり、わが子を守るように警戒の姿勢を示していた。

私は「大丈夫だから一度見せてやりなさい」と「ラク」に言い聞かせ、注意しながら子犬たちを見せてやった。そして「仲間が増えたんだから可愛がってやるのよ」と教えた。

六頭の子犬たちが母乳に群がってくると、お乳を飲ませやすいように姿勢をかえたり、子犬同士が下敷きにならないように配慮していた。

乳歯が生えてくると、尖った歯のある口でお乳に吸いつくので、「ラク」のお乳は傷だらけで痛々しく、私が見ても可哀想なほどだったが、飲みおわるまでジッと身体を横たえて飲ませていた。

やがて離乳食を与える時期になり、外に小さな食器を六つ並べて食べさせることにした。先に食べ終わった子犬は、となりの食器を覗き込んで、奪いあって食べようとする。なかには母親が食べている食器に近づくと、鼻先で勢いよくとばされて、キャンキャン〜と悲鳴をあげていた。どのこいぬも数回母親からこの洗礼を受けたのではないかと思う。

私は母親である「ラク」を叱らないで、子犬たちの様子を観察していたが、何度かねとばされても母親のそばへ近づいていく。言葉はなくても親子の絆は人も犬も同じだと思った。

そして、二ヶ月が過ぎたころ、子犬たちは現在わが家にいる「カイ」を残して、それぞれの家庭へ貰われていった。

一頭ずついなくなっていくのを感じた「ラク」は、はじめ落ち着かない様子で探しまわっていたが、そのうち、これが飼い犬の宿命だと悟ったのか、もう動じなくなっていた。

ただ最後の子犬が貰われていく日の朝、「ラク」はその朝自分の食べたものをその子犬の前に吐き出して食べさせているのを見たとき、真実はともかく、平然としているように見えても母犬の悲しみが伝わってくるように感じた。

母親になって「ラク」がどのように変化するのか、興味をもって観てきたが、出産を経験して

「ラク」は予想に反して、非常に強い性格が現われてくるようになった。

「ラク」は予想に反して、非常に強い性格が現われてくるようになった。

親離れまでの日々

二ヶ月はまたたく間に過ぎました。

親離れです。。もうすぐ里親さんに行きます。



叱られてもお母さんのそばがいいのです。



親子で昼寝。

ジェリーから洗礼を受けています。

そう。。緊張の一瞬！！



ちょっと怖





「カイ（界）」は「ラク」が産んだ六頭のなかの一頭でオス犬です。

すでに五頭の大型犬（ユウ、シュン、ラク、ロク、ジェリー）を飼っていたので、大型犬六頭を同時に飼うことは、尋常とも思えず非常に迷ったものです。しかし、母親「ラク」の遺伝子をどのように受け継ぐ子になるのか、母親を十分熟知していたので、一大決心をして飼うことにきめたのでした。この経験は今ま

で以上に犬の群れ社会を理解し深めることにつながっていきました。

普通、子犬は生まれて二、三ヶ月くらいで新しい飼い主さんのところに行くか、ペットショップで新しい飼い主にであいます。そんな経験をまったくせず、「カイ」は成長していきま

。

犬たちにオヤツを与えようとする、その気配で六頭の犬たちは、私のそばに寄ってきます。それぞれ距離間や位置関係を微妙に意識して「カイ」は先輩犬より絶対前へ出ることはありません。一番後ろで自分の順番がくるのをジッと待っているのです。

そのころわが家は、リビングの隣にサンルームを設けて、犬たち専用の寝室とし、家族の暮らすリビングルームへも自由に出入りすることを許していました。散歩から帰って、先輩たち全員の足を洗い終わるまで、自分は最後だと、みな様子を伺いながら辛抱強く待っていました。特に私が食事の準備をしているときに、うろうろ勝手に動き回ると容赦なく母親の「ラク」におさえつけられていました。



ある日「カイ」だけつれて出かけようとする、と、「みなはどうして行かないの？、じゃ～ぼくは行きません」と絶対車に乗りません。先輩たちが車に飛び乗ると、そのときは急いで車に飛び乗るのです。また散歩時、置いていかれると遠吠えを始めるのですが、そこにボスの「シュン」や「ユウ」がいるとおとなしく待っているのです。



生まれたときは兄妹の中で一番やんちゃな性格でしたが、犬軍団の末っ子として先輩犬たちから群れのルールを厳しくしつけられたので、非情なほど犬同士の付き合い方をわきまえていきました。

またドッグランに行くと、ボス犬「シュン」から追いかけられることがしばしばありました。いずれ自分を追い越して、リーダーになるかもしれないと本能的に「シュン」は感じるのでしょう。このとき母犬の「ラク」は「シュン」に従って、いっしょに獲物をしとめようとする行動に出るのです。「シュン」は本気で噛んでいるわけではないのですが、「カイ」の首根っこは「シュン」の牙で生傷をよくつくっていました。「ラク」に「何故あなたは母親なのに助けないの、あなたの子どもでしょう」と注意を促すけれども、いかに本気でないとはいえ、「シュン」に従ってわが子を攻撃するような行動に最初は理解できませんでした。

人間社会では、親は子を助けるものですが、犬の群れルールは全くそうではないのです。親は種の存続のため、子を産み本能にしたがって育てていきますが、育児期を終えると親子は別々の個体となっていくようです。ターゲットになっている「カイ」は母犬「ラク」には人間が感じるような子供ではないのです。

ところが三歳を過ぎたころから、道で自分と同じくらい的大型犬に出会うと脅すように随分遅しくなっていました。ある朝のこと、「カイ」はわたしの投げたボールを見事にキャッチして素早くもってくることを繰り返していました。「つぎのボール、早く投げてよー」「キ〜キャッチしたよ、今度はどっちかな、次は〜」と夢中になり、よその犬がきてもわたしとの遊びに集中していた時のことでした。

同じような大型犬が「カイ」の後ろに回り、突然お尻にガブリと咬みついたのです。「カイ」はびっくりして声をはりあげると、振りかえって猛然と反撃に出たのでした。私は急いで「カーイ、やめなさい」と二三度大声で制止させると「カイ」は攻撃を止めて戻ってきたのです。相手の飼い主さんいわく「この子、お尻を咬む癖があるんです」と言ったのには驚いたものです。

「あーそうですかー、やっぱりしつけはキチンとした方がいいですね」と言って別れたのですが、家へ帰って「カイ」のお尻に咬まれた痕があり血が滲んでいたのを見つけたとき、どうりで珍しく怒って反撃に出たわけがわかりました。もし「カイ」にしつけが入っていなくて、制止できなかつたら無事にすまなかったことでしょう。そして、わがやの犬たち数頭がその場にいたなら、また事態は変わっていたと思います。

わたしは、訓練やしつけは特別なことができる犬にするためでなく、犬の性格や行動を理解し、飼い主と犬との信頼関係を築きあげていくことにあと思っています。

順位がはっきりしている群れ社会は、非常に統制がとりやすく六頭いても問題なく飼える事を感じています。

シュンの病気と向き合って



「シュン」は身体が大きく熊に似た顔貌で、牙をむきだして吠えようと、怖くて誰も近づけないほど迫力がありました。飼い主にとっては、セコムガードマンにいてもらうよりも安心でしたが、来客を知らせるチャイムが鳴ると、猛烈な勢いでとび出して門扉の上から、からだをのりだし牙をむいて吠えるので、万一事故防止のため、門扉を入った内側にもう一つ門扉を備えることにしたのです。宅急便を届けてくださる

方や来訪者に、恐怖感を与えては申しわけないし、「あれっ、脱走してしまった」ではすまなくなるとおもったからです。

「シュン」は一方、油断ならない知能犯で、ときどき家族のすきを狙って食卓の上の食事を盗み食いすることがありました。散歩に行くときは、六頭全部庭に出します。ほかの犬たちの散歩の合間を狙って、玄関の引き戸を開けて台所に入り、夕飯のおかずを平らげたことは数えきれないほどです。私が作る夕飯のにおいを「しめしめ、今日はこれをしとめるぞ!!」と、何食わぬ顔で私の足元近くに侍っているのです。

..

たけのこ、ばら肉、野菜の湯がいたもの、とにかくわれわれ人間がたべてるもの何でも、すきあらば「ごちそう、いただき〜」の常習犯でした。あるとき犯行現場を夫に見つけられ、思い切り蹴り飛ばされて玄関のドアにぶつかったことがありました。近くにいた犬たちが一瞬おとなしくなるほど大きな音がして、分厚いガラス板が割れてしまったのです。「シュン」に怪我はなくて、ただ低姿勢でごめんなさいのポーズをとっていたのですが、一方ガラスの入替えに大損害を被ってしまったことがありました。食べ物に関しては、悪いことは承知のうえでやるのですから、飼い主の方が注意しなければ無駄な叱りをしてしまうことになってしまいます。それでも、いざとなったときには、毅然とした態度で厳しく叱責をしないと服従心のない犬になってしまいます。こうした犯行や悪戯もありましたが、甘えん坊な性格も持ち合わせていて、私が出かけるときは、いつも一緒でした。しかし「シュン」は、免疫力の弱い体質で様々な病気やケガで苦しむようになったのです。

病歴を振り返ると

- ・ 六ヶ月のとき、幼児性の湿疹
- ・ 十ヶ月のとき、剥離骨折
- ・ 一歳のとき、毛包虫症
- ・ 一歳半のとき、右後ろ足を痛そうに上げて歩くので、膝蓋骨の脱臼か靭帯が切れている可能性があ

るといわれ、試験手術をうけた。

二歳のとき、慢性膀胱炎以後亡くなるまで続く。

・四歳のとき、腸閉塞

・九歳のとき、自己免疫性溶血性貧血と診断され、食べたものが消化吸収できないため、次々と内臓の

障害がでてきた。

難病といわれるものばかりでした。

そのうち二件の闘病記を紹介させていただく。

毛包中症（アカラス）

一歳になったころ、「毛包虫症（アカラス）」といわれる皮膚病にかかったのです。

犬の多くは、毛根に寄生する毛包虫を持っていて、免疫力が低下したときに湿疹の症状が出てきます。犬特有の疾患で、最も治りにくい皮膚病の代表といわれています。昔は、この皮膚病にかかった犬は安楽死の道を選ぶほかなかったと聞かされました。

梅雨に入ったころ、頬にジクジクした湿疹ができていることに気づき、わが家の犬用万能薬をつけて様子を見ることにしたのです。しかし一週間経ってもまったく治る気配がないので、病院で検査をしてもらうと「アカラスですね」と言われたのです。顕微鏡を覗かせてもらうと、なんともグロテスクな虫でした。

治療方法は、殺虫剤を希釈し、ゴム手袋をして、皮膚のただれているところに希釈液をすり込みます。「シュン」の被毛は長くて地肌にすり込みにくく、赤くただれた箇所は日ごとに広がっていきました。そこで今度は、一週間に一度アイボメック注射をうちに一ヶ月通いました。四回打ちましたが目に見える効果はありませんでした。そこで患部に薬を塗りやすくするために、一度全身の毛をきれいに刈ってもらい沐浴をさせてみました。丸裸になって自宅へ帰ってきた「シュン」の姿は全く他犬種のように、何か恥かしそうにしている様子を見てみんなで笑ってしまったものです。



日々、ぬり薬を患部にすり込むことを怠りなくやっていたとき、ふっと、海に連れていったらどうだろう、との思いが浮かんだのです。季節は八月、早速ほかの犬たちも一緒につれて、日本海にある天の橋立に近い由良海岸へつれていくことにしたのです。朝五時半に犬たちを乗せて自宅を出発。そして砂浜で朝食をとらせ、一般の海水浴客が泳ぎにくる前に帰り支度をして、お昼には帰路につくようにしました。みな

疲れて車の中で爆睡状態でした。この海水浴療法を何度か繰り返しているうちに、ジクジクしていた湿疹が太陽と潮風にあたって殺菌されたのかもしれない。病巣の広がりが治まり、強敵

アカラスは完治したのです。

なにが効いたのか定かではありませんが、飼い主にとってはこの上なくうれしい瞬間でした。

「シュン！よかったね」と病気に耐え抜いた「シュン」を祝福しました。きれいな被毛に戻った姿は見るからに精悍でした。

慢性膵炎

「シュン」が慢性膵炎だと診断されたのは二歳を過ぎたころでした。

便の回数が多くなり、四〇キロを超えていた体重は一ヶ月で三八キロに痩せてしまったのです。ジャーマンシェパード犬に多く、すい臓に何らかの障害が生じて酵素が十分に分泌されないため消化不良を起こして、食べても食べても太れない病気なのです。処方としてフードに消化酵素のパンクレアチンを混ぜて与えていましたが、余り効果はありませんでした。いろんな方のアドバイスを受け「絶食させてみるのもひとつの方法です」といわれたのですが、いつもおなかをすかせている「シュン」をみていると勇気を持って実行に移すことができませんでした。

ある有名な動物病院で「一ヶ月に一度、検便と血液検査をして食事は脂肪分の少ないフードを食べさせてください」といわれたとき、検査疲れもあり私の気力は落ち込み、出るのはため息ばかりでした。「シュン」は私の気持ちを察したかのごとく、目はうつろで元気のない様子でした。私の気持ちが滅入ることで、やせていること意外、元気な「シュン」を病気にしてしまっはいけない、なんとか治る方法はないものかと祈るばかりでした。

そんな心境のときに出会った本が、獣医師の永田高司氏によって著された「神秘の治癒力」でした。著書には「人も動物も病気になったら、食生活、吸っている空気、住環境、仕事、家族関係、友人関係、地域社会、生きる目的など、自然と調和したライフスタイルに変えなければいけない」と書いてあったのです。

そのとき私は、ただこまねいているだけではなく、もっとほかにいろいろ試してみようと感じたのです。何かの拍子にスイッチが入れば、すい臓から消化酵素が出るかもしれない。その本から希望と勇気を与えられたような気がしました。

それから私は決心して他の犬たちをみんな家に残し「シュン」だけをつれて、三〇キロ先にあるドッグランで、一週間泊り込むことにしたのでした。そこは通る人も少なく、夜になると私の泊れるハウスの灯りだけが、ぽつんと燈っているだけの真暗闇になるのです。「シュン」がボディガードしてくれなければ夜はとても独りでは怖くて泊れないところなのです。私は寝袋に入り「シュン」を足元で寝かせました。少しでもあやしい物音がすれば、凄みのある吠え声で警備をしてくれたので、安心して眠ることができました。太陽が昇れば、夜のしじまと違い太陽の光を全身に浴びることができ、川のせせらぎの音も、さわやかに聞こえる環境です。

朝起きると「シュン」は私について朝露に濡れた草の上を自由に走っていました。朝の清々しい

空気に包まれ、初夏の太陽の光が山肌の緑にキラキラと照り映えていました。朝食を与えた後、しばらく休ませてまたボール遊びをしたりして時をすごしました。ドッグランで本を読んだり、お茶タイムをしたり、私も自然からエネルギーをもらったようでした。

こうして「シュン」とだけ過ごした一週間の合宿を終えて、自宅に戻ったとき、夫の第一声は、「シュン、太ったじゃないか、目がイキイキしている」でした。効果はあったのだと、とても嬉しい気持ちになったものです。近所の方からも「シュンちゃん太った？」と声をかけられたのです。特別な治療をしたわけではなく、合宿の間中、自然に恵まれた環境で一日中清澄な空気を吸い過ごしていたに過ぎなかったのです。それは飼い主の私まで心身ともに生まれ変わってゆくようだったので、きっと「シュン」も犬本来の生きようとする遺伝子が目覚めてきたのかもしれない。相貌とは裏腹に飼主といることが何より好きだった「シュン」に良い影響を与えたのかもしれない。



しかし慢性膀胱炎が完治したわけではないのです。

「シュン」の生きた後半生は、飼主にとって楽しいことも沢山ありましたが、その反面いつも病気と向き合い、少し良くなるとホッと喜び、悪化すると落ち込んで、一喜一憂する年月だったようにおもいます。「シュン」が亡くなる二週間前に、もうどこへもつれて行けなくなるだろうと思って、

「シュン」と「ユウ」だけを車に乗せて、コウノトリで有名な豊岡そして「竹の海岸」へ旅行したのです。これが、最後の忘れられない思い出となりました。

シュンとの別れ



二〇〇七年（平成十九年）三月十八日、「シュン」は永眠しました。

亡くなる前日、きっとあれは動物の直感で飼い主との別れを予感していたのだと、私にはそのように思えるのです。

好物のヨーグルトやみかんを口元へ持っていても、食べようとしなくなっていました。ゆっくり身体をさすってやると

、気持ちよさそうに「クゥー」と短い声をたて、嬉しそうに私の腕に首を乗せてゆっくり呼吸をしていました。そして脛に光るものがにじんできているのをかんじたのです。

犬の情動は言葉はなく細やかではないかもしれませんが。しかし素直でからだ全体で感情を表します。嬉しいときは大きく尻尾を振って飼い主には絶対服従してますとばかりに、全身を小さく見せ耳までひれ伏して喜びを表現します。しかし悲しいときには尻尾を下げ目もうつろです。そして人と同じようにやっぱり涙を流すとおもうのです。

息を引き取る瞬間、「シュン！、シュン！」と身体をゆすって名前を呼ぶと、最後の力をふりしぼってからだをを起こし「おかあさ～ん！と叫ぶように大きく口を開け、しかし、声を出す気力のないまま二度と起き上がることはありませんでした。飼主の呼びかけに最後まで応えようとした従順な姿に、今も涙せずにはられません。そして犬はこんなにも強く人の心を捉えてゆくものかと改めて思いしったのでした。



「シュン」と「ロク」が死んで二年後、二〇〇九年（平成二十一年）十一月十九日「ユウ」は十二歳七ヶ月の生涯を、完全燃焼しつくして、彼らのもとへ旅立っていきました。

咳をしていることに気がつき病院へつれて行ったのは、亡くなる八日前の十一日でした。診察の結果「心臓弁膜症」と診断されたのです。その日はまだ元気にはしていましたが、二日後には、ご飯を残して生肉や野菜だけしかたべません。それで私はお肉を多くして、野菜をまぜてやると、残さずにきれいに食べました。それから二日後、こんどは唾液が鼻腔に溜まっているようなので再び病院に行くと「肺水腫」と診断され「今晚くらい危ないです」と言われたのです。わずか四、五日で病状がすすんでしまったのです。診察を終えた後歩くことも出来ない状態であり、獣医さんが「ユウ」を抱いて車に乗せてくださいました。

振り返ると、十月の終わりごろから動きが緩慢になっていたのも、「ユウ」だけを他の犬とは別にゆっくり時間をかけて散歩をさせるようにしていたのです。ドッグランでは以前のように走ることは少なく、みんなから離れた場所でジーツと私の姿を追っていたのを思い出します。「長生きしたご褒美の病気です」と獣医さんから言われても、常に犬軍団のリーダーとして存在感があり、活発に躍動していた姿しか思い出せないのに、ご褒美はもっと別なものであって欲しいと思えてなりませんでした。

「ユウ」の容態は診断された通り数日で坂道を転げ落ちるように悪化していったのです。次の日も病院へつれていきました。昨日と同様、危ない状態だと告げられました。もう二度とドッグランへはつれて行けないかもしれないと思い、病院の帰りに遠回りをしてドッグランに立ち寄たのでした。ここで「ユウ」は大勢の犬たちと毎日いっしょに走り、跳び、ボールを追いかけて、女王として君臨していたのです。しかし私が車から降りても、その時はもう降りる体力すらなくなっていました。「力なく窓から外を眺めている姿は何とも寂しげだった」と夫が話してくれました。「よし、抱いてつれて行ってやろう」と言って、夫が抱きあげて車から降ろすと、「ユウ」は自分で立ちあがって、よろよろと私の立っている方に向かって歩いて来たのでした。私の投げるボールや石を追いかけて遊ぶことが大好きだったから、目の前にそっと石を置いてみましたが、目を向けただけでそれを啜る気力すらありませんでした。それなのに、最後の力をふりしぼって、私の所まで歩いて来た姿を思うと胸がいっぱいになり、涙で目がかすれてしまったのでした。何よりも飼い主と一緒にいることを誇りに思い、どんなときもそばから離れず、いつも見守ってくれた「ユウ」に、犬の持つすばらしい面を発見したのでした。そしてそれがドッグランを訪れた最後となってしまったのです。

その日の晩は、お肉、チーズケーキ、ハチミツ、ヨーグルトなどを普通に食べました。からだをさすってやると私を見上げ、うれしそうにしていた顔の表情からは、とてもとても死期が迫っているようには見えませんでした。ところが次の日、朝から食べ物はいっさい口にしなくなったのです。それでも便意を催すと自力で立ち上がって庭へ出て排便をして、玄関先まで戻るとバタリと崩れるように倒れて、自力では起き上がれない状態でした。抱きかかえて寝床に連れ戻すと、臥せの姿勢で自分の身体を支えて、ゆっくり呼吸をしていたのです。



その夜十時二十五分、突然呼吸が止まったかのように感じたので、私は「ユウ」を抱きかかえ大きな声で「ユウ、ユウ」と何度も名前を呼んだのでした。すでにクレートに入って眠っていた他の犬たちも気配を感じて、一瞬叫ぶように吠えました。しかし「ユウ」は大きく胸を膨らませ、最後の息を吐くと臉を震わせ二度と動くことはありませんでした。呼べば、今にも立ち上がってきそうな静かで安らかな表情でした。もうどんなに呼んでも帰ってこないのだと思ったとき、猛烈な寂しさに襲われ涙がこみ上げて止まりませんでした。そして「ユウ」とのいろんな思い出がかけめぐり、たくさんの学びをさせてもらったことに感謝でした。

私は遺体の前に線香をあげ「ユウ」が最後に食べたお肉とチーズケーキを供えました。埋葬した数日後、しとしとと冷たい雨の日が続いていました。華やかに生き、飼い主と訓練に励み、遊び、そして私に溢れるほどの宝物を遺してってくれました。後に残った犬たちに、自分の最期のあるがままの姿を見せ、静かに、悠然と去っていったことはこの晩秋の忘れられぬできごとでありました。飼い主がいうのもおこがましいのですが、私は「ユウ」を「王者の死」に相応しい最期だったと称えてやりたいと、そしてもう、「ユウ」のような傑出した犬に出会うことはないだろうと思っています。





私は毎朝一頭ずつの名前を呼びながらサンルームに置いてあるクレートの扉を次々と開けていきます。待ってましたとばかり元気よく寝床から飛び出してくるラブラドルの「ラク」母さん六才とその子「カイ」♂三歳。そしてシェパード犬♀「ユウ」七才、ミックス犬♀「ジェリー」十才、家の中を寝床としているシェパード犬♂「シュン」六

才半とミックス犬♂「ロク」十五才、合計六頭の朝の始まりです。庭へ走り出て排尿そして排便。私はそれぞれの餌の量や前日に食べさせたものを思い出し、便を見て健康チェックをします。

こんな騒がしい朝のひとつまを人様にお話すると「ワ一大変」、「餌代が・・・」、あるいは「散歩が・・・」と、いつもそんなことを言われます。確かに大所帯は時間も労力も経費もその分だけかかりますが、それ以上に犬の世話は私にとって楽しい時間であり、飼主の愛情表現であると思っています。その様子が他の人からは本当の犬好きに映っているようです。

最近ご近所の方から、手術を受けて入院するので退院するまでの間、散歩だけさせてもらえないかと頼まれたのです。朝晩の散歩時によく出会い、犬たちも顔なじみだからきっとその方は大丈夫と思われたのだと思います。しかし平素何事もなくすれ違っても、よその犬が我家のテリトリーに入ってくると全く違って来るものなのです。犬の社会は厳然とした縦社会であり、群れ意識、テリトリー意識も強く、我家の六頭の群れに珍入犬があれば「おまえはなにもの?」「なぜここに?」と一番下の順位のものまでが臭いを嗅ぎ調べにいきます。

さて我家に預けられた老犬に対し、ボスの「シュン」はまったく意に介さずちょっと臭いを嗅いだだけで立ち去りました。二番手の「ユウ」は、幼かった頃にそのワンちゃんとボールの取り合いで押さえつけられた経験があったのでした。老犬になった侵入犬に体あたりをして脅すようなしぐさをするので、私が注意をすると二度で止めてその場を離れたのでした。自分をアピールする事の上質な「ラク」は非常に低姿勢で接していました。昔はなかなかの気性の持ち主だった事を「ラク」は覚えていたようでした。

縦社会の厳しい序列と群れで暮らしてきた犬たちの生きる術は、無意識であっても自分を守り種を残すことを最優先にした行動であることを思います。群れで生きるからこそ相手に媚びたり、意地悪をしたり、嫉妬をしたり、忠実に振舞ったりと、自分の置かれている立場や環境を素直に受け入れています。人間も群れで生きる動物ですが、犬との生活から、言い訳をせず、今を受け入れ、シンプルに生きるすべを教えられたように思います。

犬社会のルール（１）一群れの中の順位



犬の群れ行動は非常に面白いものです。

犬同士嫉妬もするし、意地悪もする、また嫌がらせも、弱いものいじめもします。いつも自分中心であり、飼主の愛情をいちばんに自分へ向けさせ、忠実さを表現するあらわれでもあるのです。群れのなかの犬同士の喧嘩はほとんどこれが原因で、飼主がちょっとよそのワンちゃんの頭を撫

でただけでも犬の性格によってはプライドに傷がつくようです。人間社会のような理性は存在しないようです。

犬は群れの中の順位を非常によくわきまえていて、先輩の前を通らなければいけないときは敬意を表して目を合わせないように低姿勢で通ったりします。また先輩のご機嫌に反したときはすごい勢いで押さえつけられたりします。

そのため、呼んでも金縛りにあったようにその場から動けず、私の助けをかりなければそばまでくることが出来ません。誰かの名前を呼ぶと、自分を先にアピールしたい犬が邪魔をしにきたり、いつも順位を意識しながら飼い主の愛情が自分に向けられることを一番の喜びとし生きがいとしているのです。

この順位のトップは体の大きい年長のオスがなり、同性の場合は気性の強さだったり、知力に優れているものになったりします。犬たちが決める順位にしたがって私もそれを認めて接しています。それが犬社会の平和を守ることになるからです。

犬社会のルール（２）一犬の順位は犬に任せて



訓練所育ちの「ラク」は生後六十四日で先住犬四頭いる我が家に来ました。非常に犬社会の付き合い方がうまく大型犬の中に入ってもひたすら低姿勢で挨拶をして回り、自分よりはるかに小さな小型犬にさえも道で出会えば顔を地面にすりつけて「わたしラクです。よろしくね」といった態度で挨拶をしていました。

こうした性格の「ラク」でしたが、子犬を出産した後、四歳年上の「ジェリー」と数回バトルを繰り返し、「ジェリー」より上に位置するようになっていきました。しかし気性の強い「ジェリー」は我慢ならないこともあるようで、屋外では隙を見て「ラク」にマウンティングをして自分のほうが優位なのだという態度をしめすことがありました。本来ラブラドルの性格は、とても陽気で楽天的なところがあるので、少々相手が横柄な態度に出ても「このくらいならま〜いいか」と上手に交わして平和を守っているところもあるのです。

しかしどうしても許せないのは食事と飼主との順位なのです。あるとき「ユウ」と「シュン」の散歩の次は自分だと、門の前で待っていた「ラク」でしたが、私が帰ってきたとたん、後ろの方で待っていた「ジェリー」が「ラク」の前に出て私をむかえたのでした。その行動に「もう我慢ができない！！順位をわきまえなさい！」という気持ちだったのでしょう。すごい勢いで自分の前に出てきた「ジェリー」を押さえつけ激しい争いになったことがありました。

可愛い顔をしているのに、ここ一番の「ラク」には凄みがあります。犬が決めた順位を飼主が認めないと返ってストレスをためさせてしまうことにもなります。

やっぱり犬にとって幸せなことは、愛情をかけてくれる飼主がいることであり、自分を認めてくれる飼主とともに生活できることだと思っています。





忠犬ハチ公といえば忠実な犬の代名詞になっていますが、飼い主から愛情をかけられている犬はみな忠犬ハチ公だと私は思っています。

わが家の犬たちの行動を見ても忠犬そのものです。

「ユウ」についてですが、今日は一緒に連れて行ってもらえるかどうかわからないのに、

夫が家にいるときはあとにつきまとい、部屋に入ると出てくるまでドアにピタリとからだを寄せて耳をそばだて待ちかまえています。そして出てくると、今日はドッグランへ連れて行ってもらえるかどうか、様子を窺いながら、後ろについてまわるのです。連れて行ってもらえるや、いち早く車のところへ先回りして待っています。すきあらば一緒について出ようとする敏捷な身のこなしを静止させることが大変なときもあります。期待に反して置いていかれると車の去っていった方向をジーッと眺めています。

私が外出するときはほとんど「シュン」を車に乗せて出かけます。

そのため「シュン」にとって私が出かける事は自分も一緒に出かけることだと思っています。外出先で長く待たされても、そば近く一緒にいることを誇りに思っているようです。「シュン」は会話の内容や私の動きで次の行動を予測し、やはり「ユウ」と同じように先回りして車の下で待っています。その犬の観察力のすごさには驚かされます。置いていかれたときは、ほかの犬たちが家の中に入っても「シュン」だけは門の前で私の帰りを待っているそうです。聞けばなんと可愛いのだろうと一瞬「ホロリ。。」となる話ですが、それが本来犬の持っている習性であることに気づかされるのです。

「南極物語」のタローとジローも「忠犬ハチ公」です。人間の都合で一年間も極寒の地に置き去りにされても、再び飼い主が戻ってくれば、何もかも忘れて飛びついていきます。それが本来犬の持っている特質であることを思います。災害救助犬や盲導犬は、犬によって人が助けられています。犬は何万年も前から人に飼われ、愛されて生存してきた動物です。人と犬は長い歴史の中で信頼という絆を養ってきたのではないかと思います。

忠犬ハチ公の代名詞を持つハチは、主人が亡くなったことも知らず渋谷駅の改札口でいつもの習慣として待っていたのです。その姿を見た周りの人たちは、人間ですら恩を忘れやすいのに、い

つまでも主の恩を忘れずにいるとはなんとけなげな姿なのだろうと、当時の時代背景の下で美談となって伝えられたのでした。

亡き主をしたって、駅で待っているハチを映画の中に見ると、愛犬家ならわがやの犬とダブらせて、感傷的な気持ちになるでしょう。私は映画「ハチ公物語」を見て、あの秋田犬は賢い犬だと思いましたが、それ以上に飼い主が亡くなったあと、誰も引き取って育ててくれる人がいなかったことを可愛そうに思えたのでした。もし家族かほかの誰かが本気でハチを引きとり、第二の飼い主となって親身に世話をしていたなら、いつか駅なぞへは行かなくなっていたでしょうし、このような美談も生まれなかったと思います。

犬が飼い主を慕うのはハチだけではない、どんな犬でも飼い主が犬を裏切らず愛情を持って接してやれば、必ずどの犬も「忠犬ハチ公」になるものです。犬にとって最も幸せなことは、愛情をかけてくれる飼い主がいつもそばにいてくれることであり、自分を認めてくれる飼い主とともに暮らせることだと思っています。

海外にも知られるほど有名だったハチ公。

ほんとうにしあわせだったのでしょうか。

驚異的な犬の嗅ぎ分け能力



野生動物は外敵から身を守ったり、獲物を捕えるために牙はもちろん、聴覚や臭覚が極めて発達しています。この能力は動物自身の命を直接守る重要な力となっています。

犬の鼻腔を近くで観ると、たくさんのひだがあって、そこには2億数千万に達する嗅覚をつかさどる細胞が分布している（犬を飼う知恵 築地書館）といわれています。犬は人とともに生きてこの嗅ぎ分け能力を使って人への福祉に貢献しています。

警察犬の能力を競う訓練競技会に、「臭気選別」という種目があります。

この競技には「直臭（じかしゅう）」と「移行臭（いこうしゅう）」の二種類があります。

「直臭（じかしゅう）」とは、人が直接肌につけた布を選別台の上に乗せて、その中から指導手が持つ布と同じ臭いの布を選んで啜って持ってくる競技。「移行臭」とは「直臭」に比べてかなり高度な競技で、指導手が嗅がす臭いと同じ臭いの布を選別して啜ってくる点は同じですが、臭いの付けかたがまったく違うのです。

二十センチ四方にカットした晒し布を数百枚ビニール袋に入れ、その袋の中へ人が履いた靴下をしばらく入れておく。そうすることで、靴下の臭いが晒し布に移行します。それぞれ異なった五人の移行した晒し布を一枚ずつ選別台にのせ指導手が嗅がせた臭いと同じ布を選別して持ってくる競技。

警察犬は、犯人の足跡や遺留物から臭いを嗅ぎ取り、足取りを追う犯人捜索の専門家です。警察犬の判断は犯行の証拠品として法廷で認定されるので、この「臭気選別競技」は犯罪捜査に寄与する警察犬を育成することを目的としているので、競技の内容は極めて高度なものになっています。

「ユウ」は長い間この臭気選別競技の訓練を受けてきました。

この競技会に出場しはじめたとき、訓練士の方より「選別競技は犬にとって極めて集中力のいる作業なので、飼主が来ていることを知られると甘えが出て集中力を欠いてしまいますので、競技が終わるまで飼主は姿を見せないでください。またその日の風向き、天候によっても結果は左右されます」と言われたのです。応援に行っても風下の方向へ移動しながら、いつも遠く離れたところで観戦したものでした。

ある競技会でのことでした。

それは出場する順番を待っている「ユウ」を遠く樹の影で観ていると、「ユウ」は鼻先をうえへ

向けて空気を吸い込むしぐさをしたあと、後ろを振りかえって周囲を見まわしたのです。その様子に飼い主が来ていることを気付かれてしまったかもしれないと、急いで木の陰に身を隠して、写真やビデオ撮影は同行した犬仲間をお願いしたのです。

競技会ではかなり難しい臭いを嗅ぎ分けるのですから、大好きな飼主の臭いなどは、大勢の人たちがいても簡単に嗅ぎ分けできるはずだと、犬の持つ嗅覚のすごさに感動さえしたのです。

犬の驚異的な嗅覚や心理を掌握し、競技に集中させるプロの訓練士の技能もさすがと感心させられたものです。

何千人もの群集の中から、飼主の臭いを嗅ぎ分ける犬の嗅覚の鋭さは、このような経験をしなければ、単に犬は嗅覚のすぐれた動物なんだということくらい理解で終わっていたこととおもいます。

犬の習性



犬たちにとって何より待ち遠しいのは食事の時間です。それまでのんびり寝そべっていた犬たちも、私が食事の準備をはじめると、傍へ来て誰よりも早くありつきたいと主張するのです。このときに群れの順位や犬たちの性格がはっきりできます。

六個の食器を並べ、その日の健康状態や体力を考慮して、固形フードや生肉、野菜、米飯、その他サプリメントなどをトッピングして用意していきます。「シュン」はその間、食器の近くに誰も寄せつけないよう周囲に睨みをきかせ、「ウーワッ」と低いトーンでほかの犬たちが近寄れないよう追い払うしぐさをします。すると「ユウ」は「なにを威張ってるのよ、あんたなんか怖くないんだから！」と食器の近くまで寄ってきて、鼻に皺をよせ「シュン」にやり返します。ボスの「シュン」はプライドが許しません。

シュン 「なんだと！、じゃーやるかー」二頭で「ガウガウガウー」と始まります。

からだも声も大きくシェパード犬同士の凄みは、よその方が見られたらちょっと怖く感じるかもしれません。

「止めなさい！」私の一言で一応は収まるのですが、「まーいいかー、お互い本気でやりあっているわけではないから」という気持でいると、食事どき習慣のように小競合いがおきるのです。

この様子を見ていたほかの犬たちは、ラク「何やっているの～ 早く食事にしてよ～」といった様子で、危ないところに近寄らずひたすらジッと見守っています。

カイ「ぼく、お腹がすいたんだけど いつももらえるのかな～」とラク母さんのずーと後ろで待っています。少しでも前へ出るとラク母さんから押さえつけられることを知っているからです。

ジェリーは「私は危ないところから身を引いてずーっと後ろの方で待機しています～」

「ロク」だけは「ユウ」や「シュン」にお構いなく、食器の近くまできて「早く早く」とねだるのです。白内障であまり目が見えていないため、どこに誰がいるのかもはっきり分かっていません。ただ食事の臭いにつられて前へ来ているのです。ところが、その「ロク」に対しては「ユウ」も「シュン」も決して意地悪をしないのです。「シュン」はボスとして、老犬をいたわり守ってやっているようにさえ見えるのです。



ドッグランの脇にある家庭菜園のなかで私が仕事をしてい



ると、「カイ」は平気で畑に入って来て、目の前にあるミニトマトや好みの野菜の葉っぱをパクパク食べるのです。余り美味しそうに食べるので、叱ることをしないでその様子を時にはデジカメで撮ったりすることもあります。

ある日、畑の収穫物を家へ持ちかえり野菜の入ったバケツを玄関に置くと、出迎えにきた「カイ」が平気な顔で葉っぱのついた蕪をサッと一本くわえて先輩犬のいないところでポリポリと食べ始めたのです。そこへ「ユウ」が近寄っていくと「ウーッ」とうなり声をたてているのです。先輩犬の「ユウ」にさえ食べ物に関しては「ウー」といえるくらい成長したのかと見ていると、今度は「ユウ」が「きみ、おいしそうなもの食べているじゃないか。でも、きみの食べているものを横取りする気はないよ」といった態度で「カイ」の食べている様子を見ているのです。ところが葉っぱがちぎれて切れ端が口元から落ちたとき、「ユウ」はサッとその葉っぱを横取りして「これいただくよ」と食べ始めました。

この「カイ」と「ユウ」の食べる様子を「ラク」は離れたところでジーツとみていたのです。私がみんなに「おやつよー」って与えたものではなく、勝手に手に入れた食べ物でしたから、「ラク」がもらってなくても気にしていませんでした。ところがしばらくして「ラク」の様子がどうもおかしい、「ラクー」と呼んでも、尻尾も振らず私のところへすぐに来ないのです。何かあると思って「ラク」が座っていた場所へいってみると、なんとお漏らしをしていたのです。「ラク」は非常にルールを守る犬で、ほかの犬が「もういりません」とシグナルを出すまで、絶対横取りをしない性格です。

これはきっと自分が食べ物をとることができなかった、仲間はずれになったことからきたストレスに違いないと思ったので、「ラク」だけをつれて散歩にでてしばらく遊んできたのです。「ラク」はまた特別待遇が大好きなのです。それで満足したのか「楽しかったよ、自分だけお母さんと遊んだ」とうれしそうに尻尾を振るいつもの「ラク」に戻っていました。犬の心理の面白さ、しかし根底にあるものは人間と変わりはないように思います。



ドッグランに続く坂道を登りきると木々の梢が真っ青な冬空に向かって手を広げたように伸びています。二月の朝は寒いけれど、空気は澄みわたり静かでとても気持ちがいいのです。

グランドの下では、モグラが活躍しているらしく、掘りあげた土がところどころ小さく盛り上がっています。私はその箇所を鍬でならし石ころがあれば、犬たちにとって走りづらいと思いフェンスの外に投げるのです。

すると「ユウ」は石を投げられた方に向かって急いでとりに行き、それを啜えて戻り、また次の石を投げられるのを今か今かと垂れた尻尾を振り子のように左右に揺らしながらじーっと私の作業を見ているのです。

私は幾つか石をためてからそれを続けて投げてやると、うれしそうにとび跳ねて何度も取りにいった、私の作業が終わるまで厭きることなく繰り返していました。

ドッグランに雑草が伸びる季節になると、夫は草刈機を使って草を刈り始めます。エンジン音をたてて雑草が飛び散るように刈られていくと「ユウ」はもうそのそ場から離れようとしません。刃物が足にあたると危ないので注意をしても危なくない距離を保ちながら離れようとしません。こんな単純なことのどこに興味を惹かれるのか、動くもの、飛ぶものに対して本能的に体が反応してしまうようです。

家のガレージに、かつて「ユウ」が啜えてきた石が4個捨てがたく置いたままにしてあります。リードも首輪もそのまま保存されており、それを見るたびに十二年余りの楽しく過ごした頃を懐かしく思い出すのです。

今から十二年前、四ヶ月になったばかりの「ユウ」が我が家にやってきました。両耳が顔に比べると不似合なくらい大きくピンと立ち動く物体を見つめる眼はまさに鷹の睨みで精悍さを思わせていました。そしてお尻の下がった体形は子犬であってもGシェパードらしいしなやかさをもっていました。

子犬はたいがい物をかじって悪さをするものですが、予想をはるかに上回る悪さに驚くばかりでした。大きな植木鉢をすべて台無しにしてしまい、芝生は全滅にしてしまうし、そればかりでなく、公園を通るときにサッカーボールの蹴っている音を聞くと夢中で突進していくクセがあったのです。

私は子どもたちが怖がらないように「大丈夫よ！」と言葉をかけてから「待て！を言ってからキックをするとちゃんと持ってくるから～」とあって安心させ「ユウ」を引っ張り連れ帰っていました。

さいわい子どもたちは怖がることなく素直に「ユウ、待て！待て！」と叫んでいましたが、「待て」はするけれどキックするタイミングはなかなかどうして難しいようでした。それ以来私は大きいボールを買って遊ばせていましたが、牙ですぐパンクをさせてしまいきりがないので、ぺちゃんこのままのボールを使ってあそばせていました。

犬歯の威力はすごいと、しかし公園で遊んでいた子どもたちのなかに怖がる子がいなかったことは幸いでした。たぶんその子どもたちは大学生くらいになっていることでしょう。

そんな「ユウ」であっても、先住犬を追い越して自分がリーダーになることはありませんでした。十ヶ月を過ぎた頃より私はそのあり余る体力を毎朝夕、原付バイクで三キロの距離を走らせました。速度を上げればそれにあわせギャロップに、緩めるとトロットに変速し、その忠実な動きは天性のものなのか、決して危なく感じさせられることはありませんでした。そのあと公園でボール投げをしても夕方には体力を余すほどのエネルギーを持っていました。

正式にプロの訓練士についてトレーニングに通い始めたのは「ユウ」が十ヶ月になったときでした。入門まえにそれまで躰をどのようにしてきたか質問され、また犬の扱い方も試されました。「ユウ」そして「ロク」「ジェリー」を車に乗せて訓練所に通うようになったのです。長い間犬を飼ってきたけれど「これは犬です」程度の理解だったことに気づかされたのです。

十二年間、「ユウ」とともに数多くの学びをさせてもらいました。

競技生活から引退した後、「ユウ」は二度の交配を試みましたが、最初は着床することなく、二度目は死産で血統を残すことができないまま終わってしまったのです。私は死産した小さな胎児をきれいに洗ってお花を添えて葬り、「ユウ」を一代限りで終わらせようと思ったのです。

平成二十一年に、「シュン」や「ロク」の眠るところへ旅立ってしまいましたが、ともに訓練に励んで過ごした日々は忘れがたく、在りし日の姿を納めた写真を見ると、かつては鷹の目のように鋭かった眼は、十二年の歳月の間に余裕のあるやさしいまなざしに変わっています。たれた尻尾を振り子のように揺らしていた、あの時の、とてもうれしそうに満たされた表情は、私の胸のうちからいつまでも消えることはないでしょう。

ラクとジェリーは永遠のライバル



残暑の厳しい昼下がりにジェリーにあるアクシデントがおきたのです。

「ギャー」というものすごい悲鳴に私は「ジェリーはまたラクにやられたのかな」と独り言をいいラク&ジェリーには“永遠のライバル”の話が沢山できそうだとのおもいで慌てることなく止めに行こうとしていると「ラクは、ここにいるよ」と夫の声。「え〜」私は急いでジェリーの声が聞こ

えたほうにいてみると、なんと階段の上り口でうつ伏せ状態のまま顔だけをおこし私に助けを求めるような目で訴えていました。そ〜っと抱きかかえ床におろすと後ろ足を引きずり一歩二歩と前へすすみながらいつものように歩き出したのです。これが人間であれば救急車で大事になっていたでしょう。動物の体の柔らかさはすごい。あ〜よかった！普段二階から降りたいときには「下ろしてくれ〜」といわんばかりの叫び声をだしていたのです。私もその声を聞けば16才という年齢もあるので気持ちを察して体重11キロあるジェリーを抱いてその都度下ろしていました。その日はどうしたことか・・・きっと寝ぼけて足を踏みはずしたに違いないと、それはよく手足を動かし走っている夢を見ていたようですから。その後も懲りずにカチ、カチと爪音をたてて階段を上ってきていました。自分で上がっても下すのは私がしなければなりません。私が二階の部屋にいて気が付くときは「ジェリー頑張っ！」と声をかけ自力で上ってくるまで見守るようにしていました。その健気な姿は何ともいじらしくさえありました。またジェリーが上ってきたことに気づかず部屋のドアを閉めたままいたときなどドアの外側でぐっすり寝ていたこともありました。その寝顔は幸せそうでいつも微笑んでいました。



日曜日の朝、いつものように犬を連れて公園へ散歩に行くと、テニスラケットの素振りをしている方とキャッチボールをしている親子が楽しんでいます。私は犬の苦手な人だったらいけない、せっかくの休日を楽しんでいるのに、邪魔をしてはいけないと思い、離れたところへ犬をつれていき遊ばせていたのです。すると、「おはようございま〜す」と元気な笑顔で犬をつれた人たちが集まってきました。顔見知りでいつものメンバーでした。

私たちがいつも利用している公園は、ソフトボールができるほどの広さのグラウンドが併設されています。学校を終えた子どもたちが、サッカーや野球をしているときは、なるべく邪魔をしないように配慮しているのですが、公園は犬仲間たちのコミュニケーションの場所ともなっているのです。お互いの姓やどこにお住まいかは知らなくても、犬の名前は知っているので「なっちゃんのお母さん」とか「バロン君のお父さん」といった呼び方で充分通用しているのです。

携帯ラジオを持参している方がいて、ラジオ体操の音楽が流れると、今まで犬とボール投げをしていた人たちも犬を横に座らせて、みんなでラジオ体操を始めます。犬たちは飼主の体操している様子をジッと見守っていたり、ときには待ちきれなくなって、立木やベンチの根もとへ匂いを嗅ぎにいったりする犬もいますが、飼主は元の場所へ呼び戻してキチンと座って待つようにしつけているのです。これを続けていると、犬同士が影響し合って、どの犬もおりこうに待てるようになってゆくから不思議なものです。ラジオ体操が終わりに近づくと、それが犬にはわかるのか、ジッと待っていた犬たちも伏せの姿勢から立ちあがり、お尻をむずむずさせて早く飼主に遊んでもらいたいと要求するのです。そのしぐさを見ているとじつに微笑ましく、おりこうに待っていた後のボール投げは特に嬉しいようで、グラウンドはしばらく犬と飼主たちに占領されてしまうのです。

動物愛護法では、犬はリードに繋いで飼わなければならないとなっています。しかしそこに集まった八頭の犬はみなリードをはずされているのです。犬同士喧嘩することもなく、キャッチボールをしている人のボールを犬が追いかけても不愉快な顔はされないし、犬を見て楽しそうに笑っている様子は、動物と人が自然にとけあい共生している場のようでした。私は本当はどの街でも、こういう風景を観られる

ようになったらいいなと思ったものでした。しかし、すべての人が犬を好きではないでしょうし、怖いとさえ感じる人もいることでしょう。



私はいま愛玩動物飼養管理士の立場で、「犬のしつけ教室」を主宰していますが、どなたに対してもお願いしたいことの第一は、飼犬に子どもを産ませる予定がないのなら、不妊手術をしてやって欲しい。不用意に子犬が生まれて、捨てられたり動物処理される犬がなんと多いことか。それを避けるためにも是非お願いしたい。

第二は「終生飼養の大原則」です。犬を飼ったらどんなことがあっても最後まで飼って欲しい。飼う前に家族で充分話し合っ、最後までキチンとみてやれるかどうか真剣に考えてから決めて欲しいということです。

そして第三は飼主自身が飼い犬のことをもっと理解し、犬とコミュニケーションのとれる飼主になって欲しいということです。そこには必ずすばらしい犬ライフとベストパートナーが待っているものです。